実践報告

愛知県祭礼紀行（初春の巻）

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻　今野　元

序　あゆちのこともゆめのまたゆめ

愛知県はまつり県である。豊かな自然と活発な産業とに恵まれ、地元志向の強いと言われる尾張・三河では、多様な民俗祭礼が継承されてきた。ここでいう民俗祭礼とは、長年地元民によって受け継がれてきた地域の恒例行事のことで、『愛知県手帳』で開催告知が出ているが、東海テレビの番組「祭人魂」、各種地域紹介番組（YouTube）でも紹介されている。だがそれらも近年では、後継者の不足や近隣住民の苦情で断念させられるものが増えている。また令和２年に始まった新型コロナ・ヴィールスの蔓延で、ほとんどの祭礼が中止を余儀なくされ、危機の終息が見通せないなか、今後の存続がますます危ぶまれている。

そこで筆者は、自分が目にした光景を書き残すことにした。筆者は、平成１８年４月に愛知県立大学に赴任してから、地元長久手を出発点に、愛知県内の民俗祭礼を回ってきた。式次第や祈禱文の採録や分析は、従来から地元教育委員会などが行ってきたが、そこでは表現しきれないその場の雰囲気を、ここでは筆者が**紀行文**として描こうというのである。ただ公共交通のみでの訪問なので、時間的制約が大きく、見られていない部分も多い。民俗祭礼とは住民のための行事であり、観光資源ではないのだから、外来者はそっと様子を覗く程度に留めるのがちょうどよいだろう。また県内の全ての祭礼を網羅できた訳でもなく、あくまで執筆時点での個人的総括にすぎない。構成は、季節の移り変わりに従って描く**歳時記**の方式を採った。時刻は２４時方式で統一した。

＜本巻目次＞

１．鳳来寺山の御来光（１月１日）
２．長久手の初詣（正月）
３．名古屋の初詣（正月）
４．西三河の初詣（正月）
５．尾張萬歳と三河萬歳（正月）
６．下津具・古戸・下黒川花祭（１月２・３日）
７．鳳来寺田楽（１月３日）
８．山中八幡宮の御田植祭（デンデンガッサリ）（１月３日）
９．財賀寺の禳田祭（１月３日）
１０．熱池の御田植祭（てんてこ祭）（１月３日）
１１．上黒川花祭（１月３・４日）
１２．大谷御神楽（１月３・４日）
１３．篠島の正月祭礼・大名行列（１月３・４日）
１４．熱田神宮の初ゑびす（１月５日）
１５．伊文神社の七草粥（１月７日）

１６．佐久島の八日講祭（1月８日）
１７．砥鹿神社の弓始祭（1月８日）
１８．熱田神宮の踏歌神事（オベロベロ祭）（1月１１日）
１９．大興寺の開運達磨大祭（1月中旬）
２０．長久手の左義長（1月中旬）
２１．下粟代花祭（1月第２土・日曜日）
２２．幸田凧揚げ祭（1月第２日曜日）
２３．砥鹿神社の粥占祭（1月１５日）
２４．熱田神宮の歩射神事（1月１５日）
２５．師崎の左義長祭（1月第４日曜日）
２６．大府の七福神巡り（1月最終日曜日）

１．鳳来寺山の御来光（1月１日）

鳳来寺は奥三河の古刹である。西暦６９８年、役小角と兄弟だという利修仙人が、文武天皇の病気快癒のために藤原京に来るようにとの勅使草鹿砥公宜（くさかどきんのぶ）の要請を、三度拒んだが拒み切れず、鳳凰に乗って馳せ参じた。その後、「鳳来寺」の名を賜って寺院建立を許され、のち光明皇后から額を賜った。やがてこの鳳来寺山には真言宗・天台宗の密教道場ができた。幼少時の井伊直政がここに身を隠し、また於大の方がここに参籠して徳川家康を授かったともいわれ、のち徳川家光が華麗な東照宮、山門を併設した。廃佛毀釈で衰微したが、現在は真言宗の寺院が残っている。朽ち果てた堂宇の跡には石碑が立っている（現地説明版、『鳳来寺町誌歴史編』）。

鳳来寺山（標高６９５米）は御来光の名所でもある。大晦日の落日を背に参道を登り、暗い森を抜けて山上に着いた。参詣客も２時までには姿を消した。３時過ぎともなると参道の電燈も消え、山中は漆黒の闇となる。極寒の山中では、本堂前の田楽堂などで寒気を避ける以外に仕方がない。旗のはためき、鳥の声だけが耳に入る。鳳来寺山は「ブッポーソー」（佛法僧）の鳴き声で知られるコノハズク（声の佛法僧）で有名だが、その声は冬には聞こえない。

図１　鳳来寺山の御来光（平成２８年1月１日）

寒気に耐えて５時半になったところで、鳳来寺本堂、鳳来山東照宮に再び参拝し、社務所横の山道を登り始めた。御来光目当ての参拝客も集まり始め、連れ立って山道を登っていった。山中はまだ真暗で、月が煌々と輝くが、懐中電燈は欠かせない。険しいが、長くはない山道を通って、６時に鷹打場という突き出た岩場に着いた。東方の空が青、白、黄、赤の層を為して輝き始める。遙か遠くまで青黒い山並みが続いている。７時、朝雲から一筋の光が差した（図１）。陽光が強くなり、丸い太陽が全貌を見せた。晴れ渡った青空に黄金色の太陽が昇っていく。

東照宮、鳳来寺前を通って、参道をバス停まで降りた。下からは早朝にも拘らず、高齢の初詣客が次々と登ってくる。道端の草木には白く霜が降りていた。

２．長久手の初詣（正月）

愛知郡長久手町**大字長湫（ながくて）**の**景行天皇社**は、かつて長湫村の村社だった。長湫地区は名古屋のベッドタウンになっているが、北部には田園も残っている。同社は長久手郵便局に近い小山にあり、東部丘陵線（リニモ）からも見える。景行天皇社とは珍しい社名だが、長久手付近は猿投山など景行天皇やその家族と縁が深い。景行天皇が戦地巡幸でこの地を訪れ、石工集団である石作大連が祭殿を築いたが、承和４年（８３７年）にその故事にちなんで産土紙の社殿を造営したという（『長久手町史資料編三』）。大晦日の夜、社前には篝火が焚かれた。日付が変わると太鼓が鳴り、正面の石段に並んだ参詣客が動き始めた。社殿は木造で、摂社に神明社、白山社がある。参拝が終わると参詣者は左の坂道を下り、幄舎で氏子からお菓子の袋や御神酒の小瓶を受け取った。参道の石垣に「本年は、振舞酒は中止し、お神酒、お菓子を下記の場所で配布します」という掲示があった。前年に愛知県が自動車事故の死亡者数で全国一になったため、県下一円で飲酒運転追放運動が展開されており、御神酒の振舞もその煽りで中止を余儀なくされたのだった。

大字岩作（やざこ）の郷社だった**石作神社**（いしづくりじんじゃ）は、長久手町役場の北側の小山にある。石作神社は延喜式に「石作天神」と記載のある**式内社**である。祭神は武麻利尼命（たけまりねのみこと）で、石作連の祖先とされる。同じ祭神及び名称の郷社が、県内では海部郡甚目寺町にもあった（『愛知縣神社要覧』）。岩作地区は長久手村が発足した時には中心地で、村役場（今の市役所）もそこに置かれたが、自然も豊かである。年越しの夜、参詣者の自動車が畦道に溢れた。石作神社の社殿はコンクリート造で、五七の桐を用いている。燃え上がった焚火の周りに人々が集まり、社殿右に吊り下げられた大きな鉄の籠でも篝火が赤々と燃えていた。なおこの石作神社では、末社に檜造りの木造恵比寿天・大黒天二像が祀られており、１月５日に「初えびす」が行われる。また境外摂社の直會神社は、かつて石作神社の祭礼の直会が行われたところである。

図２　神明社の焚火（平成１９年1月１日）

大字熊張（くまばり）には北熊村の村社だった**神明社**が、愛知県立大学の山麓に鎮座している。大字熊張、大字前熊は香流川流域に広大な田圃を有し、三河に連なる山地帯の始まりでもある。鬱蒼たる森のなかに、古い木造社殿があった。付近には古墳群もあり、古代から祈りの場所だったと推測される。境内には児御前も合祀され、「お稚児さん」と呼ばれ安産の神として親しまれている。社殿前では焚火がされ、御神酒が樽から柄杓で振舞われていた。帰省した元同級生同士が集まり、積る話の花が咲いていた（図２）。

３．名古屋の初詣（正月）

大須観音（北野山真福寺宝生院）は真言宗智山派（総本山は智積院）に属する寺院である。創建は元弘３年（西暦１３３３年）で、江戸時代に現在地に移った。火災や戦災に遭い、いまの本堂は昭和４５年の建立である。この派には、成田山新勝寺や高尾山薬王院も属している。大須の街並みはいつも賑わいを見せ、東京の浅草を思わせる。名古屋飯の老舗もあるが、いまではブラジル料理やトルコ料理の店もあって、メイド喫茶など新しい業態も展開している。寺院はコンクリート造だが大きな赤い堂宇は印象的である（図３）。本堂前には大きな階段があって、交通整理がなされていた。境内にはどて煮など定番の露店が出ている。堂内では加持祈禱が行われており、朱色の法衣の僧侶が護摩を焚いていた（図４）。

図３　正月の大須観音（平成２６年１月４日）

図４　大須観音の加持祈禱（平成２６年１月４日）

大須には**亀嶽林萬松寺**（ばんしょうじ）もある。萬松寺は織田信秀を開基とする織田家の菩提寺で、名古屋城建設の際にこの地に移築された。戦災に遭い、いまでは商店街の只中のビルに本堂が入っている。多くの細長い長い提燈が印象的で、境内の前には織田信長のからくり時計があった。

４．西三河の初詣（正月）

志賀毘沙門天（多聞山妙福寺）は、聖徳太子作と言われる毘沙門天像があり、日本三大毘沙門の一つ、三河七福神の一つと称される。また徳川家康が先勝祈願をしたことから、勝運の神としても崇められている。

図５　志賀毘沙門天（平成３０年１月２日）

図６　毘沙門堂の内部（平成３０年１月２日）

名鉄三河線碧南駅に着いた時には１６時近くなっていた。夕日が差すなかを、子種橋で堀川を渡って志賀に向かった。木造の古い町並みが残っており、地蔵堂には鏡餅が備えられている。風神、雷神のいる山門を入って、毘沙門堂は本堂の左側にあった（図５）。堂内では太鼓が威勢よく鳴らされ、読経が

なされていた。よく聞いてみると、願主の名前を読み上げている。堂内には、夥しい数の鏡餅が備えられ、一つ一つに奉納者の名前が記載されている（図６）。

境内には他にも、小さな祠や地蔵、お神酒接待、甘酒接待の場所もあった。幔幕の紋は、法輪を２匹の百足が取り巻いているものだった。その時、山門の楼上にある鐘が鳴った。

５．尾張萬歳と三河萬歳（正月）

萬歳は千秋萬歳（せんずまんざい）の略称で、正月の祝福芸能である。萬歳は、農民たちが農閑期に出稼ぎをすることで発達した。三河萬歳や尾張萬歳は江戸に出稼ぎに行って有名になった。尾張、三河以外にも、大和萬歳、越前萬歳、伊予萬歳など多くの萬歳が全国にあった。太夫と才蔵が家々を回って御祝儀をもらうという「門付け」は衰退し、いまは技術伝承者が神社などで披露するようになっている。放下僧のように芸能者として全国を歩くことから、かつては隠密としての役割を果たすこともあった。最近では技術の伝承が学校のクラブなどで行われることも多い（『尾張万歳たずねたずねて』など）。

図７　尾張萬歳（門付け萬歳）（平成２８年１月１日）

図８　尾張萬歳（御殿萬歳）（平成２８年１月１日）

知多市の**八幡神社**では毎年正月に尾張萬歳の奉納公演がある。この知多半島の萬歳に関しては、「知多萬歳」に分類することもある。八幡神社は名鉄常滑線寺本駅からすぐのところにある。公演は１０時３０分からと１４時からの２回だが、見学したのは後者だった。最初に行われたのは、正月向きの門付け萬歳である。風折烏帽子と小素襖の太夫、大黒頭巾と小袖の才蔵が、舞台の前で歌い踊った（図７）。次は尾張萬歳の代表的演目の御殿萬歳である。同じ装束の５人が舞台で、鼓を打ち、立ったり座ったりして「エヘ、オホ」と陽気に歌い、お捻りが乱れ飛んだ（図８）。最後は三味線と鼓の競演である三曲萬歳で、謎かけなど軽妙な語りを展開した（図９）。

図９　尾張萬歳（三曲萬歳）（平成２８年１月１日）

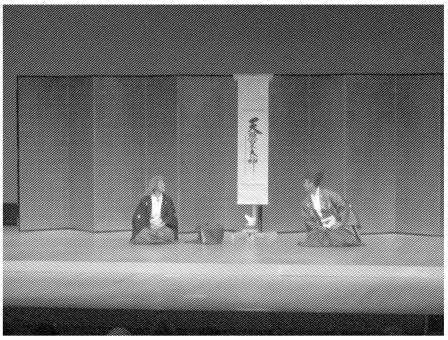

図１０　三河萬歳（平成２４年１月２９日）

三河萬歳は三重県鈴鹿市で行われた萬歳サミット及び愛知大学綜合郷土研究所で見学した。三河萬歳は陰陽道と結びつき、芸能に傾斜した尾張萬歳よりも祈禱を重んじたため、明治に入

って陰陽道が規制されると、神道化することで存続を図った。装束は、太夫も才蔵も神職のもので、太夫は笏を持ち、「天照皇大神」の掛軸をして行っている（図１０）。だが陽気に歌い踊るところは尾張と変わりない（『愛知県史別編　民俗３三河』なども参考にした）。

６．下津具・古戸・下黒川花祭（1月２・３日）

花祭は霜月神楽の一種である。霜月神楽は陰暦霜月に行われた天竜川中流域の湯立神事で、修験道、とりわけ両部神道、熊野信仰、白山信仰、伊勢信仰、秋葉信仰の影響を受けており、神事では祭司長である宮太夫が印を結ぶ光景が見られる。平成中期の段階では、１７の「花祭」（全て愛知県）、３つの「花の舞」（全て静岡県）、４つの神楽（１つは愛知県、３つは長野県）が存続していたが、その後北設楽郡豊根村の間黒、山内、同郡東栄町の布川で実施できなくなった。元来花祭は神佛習合の祭礼で、神佛分離で佛教色を排除したもの（神道花）、排除しなかったもの（佛花）があるが、両者の境界は曖昧である。宮太夫及び宮人（みょうど）からなる世襲の祭司団が付近の滝で身を清めて清水を汲み（滝祓い）、上空から来る諸霊を祀り（高根祭・天狗祭）、白蓋（びゃっけ）、湯蓋（ゆぶた）、ざぜち（切り紙）という飾りを天井から下げ、結界を張って舞庭（まいど：湯立や舞の場）・神座（かんざ：囃子方の場）・神部屋（かんべや：面を祀る舞子の楽屋）を設定し（辻固め・しめおろしなど）、八百万の神々の来臨を願い（神入り）、竈に大釜をかけて湯を沸かし（竈祓い）、立ち上る湯気の周りで、太鼓や笛に合わせて舞を披露し、最後に結界を解き（外道がり）、面を仕舞い、神々に帰還を願う（神返し・鎮めなど）というのが基本型である。舞は、撥の舞（太鼓の撥を清める）、地固めの舞（舞庭を清める）、花の舞（素面の少年たちの舞）、山見鬼（山割鬼とも：鉞で白山を割る）、三ツ舞（素面の３人の舞）、榊鬼、四ツ舞（素面の４人の舞）、ひのねぎ・みこ・おきなの舞（仮面をつけた舞、おどけた動作や性的表現を含む）、湯ばやし（釜の湯を「湯たぶさ」という藁束で振りかける素面の舞）、朝鬼（茂吉鬼）、獅子舞といった構成になる。午後から始まって夜通し舞い、次の日も続く行事である。郡上踊りのように皆で同様に踊るのではなく、舞うのは舞子で、せいと衆（聴衆）はその周囲で調子を合わせながら体を動かし、笛を吹き、あるいは「テーホヘ、テホヘ」と叫んで囃し立て、舞子をからかって悪態をつくうちに、一同が陶酔感に満たされていく。太陽暦の採用に伴い、いまでは集落ごとに１１月から３月までに広くまたがって行われる。集落での生活が難しく、関係者が都会へ移住していることが多いので、彼らが帰郷できるよう土日に行われるようになってきた。かつては民家を「花宿」に選んだが（宿花）、いまでは神社の舞殿（宮花）や公民館などを用いている。舞は男性のみが務めるのが習わしだが、近年は少子化のため、女性の加勢を借りる場合も出てきた。夜を徹しての実施が厳しいので、日曜日一日で実施する集落もある（『東栄町誌伝統芸能編』など）。

１月２日には下津具、古戸、下黒川で花祭が行われる。３か所は離れているが、料金５００円で乗り放題の巡回マイクロバスがつないでいる。バスは飯田線東栄駅から夕方に出発した。

最初に入ったのは**下津具**である。下津具花祭は大入系で、白鳥神社で行われるが、廃佛毀釈や火事で揉め、神事はあまり行わなくなったという。日程も時代により大きく変わった。そこには屋内の舞庭ではなく、舞場（まいど）という瓦葺の立派な舞台があり、五色の草で飾られ、囲炉裏のある見学所から舞をよく見ることができる（図１１）。ただ舞場が孤立している分、せいと衆が舞子の周囲に群がって気勢を上げることは難しい。花見舞を奉納すると、白飯、赤味噌汁、沢庵、金平ごぼうの接待を受けた。この他に、餅や御守なども土産にもらった。鬼は夜中から出始めるのが通例だが、ここでは２１時にもう榊鬼が登場した（図１２）。一本榊といって、津具では願主の要望で何度も榊鬼が登場するのである。また津具の榊鬼は、古榊と榊鬼との２匹で登場する。２３時ころ、ひょっとこが見学席にも乗り込んで、赤味噌の付いた擂粉木で客を追いかけ、頬に味噌を付けていった。当時**北設楽郡津具村**はすでに同郡設楽町に合併されていたが、周囲の焼き鳥、五平餅、熱燗などの露店の幄舎には「津具村観光協会」の文字がある。その前では赤々と焚火がされ、消防団員など村人たちが語らっていた。奉納者を紹介する毛筆の紙が板塀に次々と張られていく（『津具村誌』、「奥三河のき山放送局第55回」なども参考にした）。

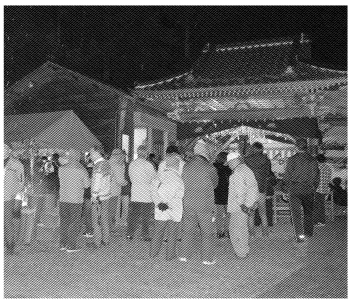

図１１　下津具花祭の舞場（平成３１年１月２日）

図１２　下津具花祭の榊鬼（平成３１年１月２日）

０時頃、マイクロバスで**北設楽郡東栄町の古戸**（ふっと）に移った。古戸花祭では振草系のなかで最も古いと言われるが、舞庭は現代的な古戸会館内に設けられている（図１３）。土間はコンクリートだが、その上に土で竈が築いてある。花見料を奉納して米飯や御守の土産をもらったが、時間が遅く、露店などはほぼ終了していた。舞庭は五色の草で飾られ、山見鬼の舞が行われており、剣を持った女児たちの三ツ舞に移った。神座にいる宮人たちは、以前古戸の白山祭でも見た、地域の祭礼を守る人々である。会館前では豆炭が赤々と燃えていた。古戸には仮眠所があり、そこで少し休むことが出来た。壁の掲示からは、地域振興のために普段から尽力している様子が見て取れた。また古戸会館前には、大きく鬼を描いた花祭の看板があった。

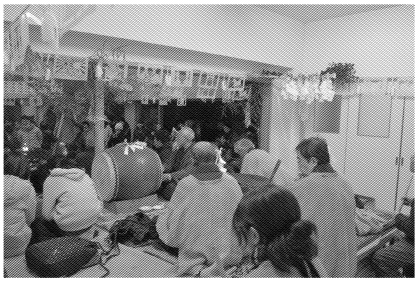

図１３　古戸花祭の神座（平成３１年１月３日）

３時頃、**北設楽郡豊根村の下黒川**に移った。下黒川花祭りは文禄の頃には記録があり、江戸時代の開催日は１１月１６日だった。下黒川花祭は大入系である。花宿は豊根村役場前のほのぼの会館である。入口に神渡りを仰いだ祠が置いてあり、賽銭箱もあった。舞庭には五徳を置き、釜で湯が立てられている。舞庭の四方には榊が立てられ、神座の太鼓にも注連縄がしてあって、榊鬼が舞っていた（図１４）。五葉木瓜の津島神社の幔幕が張られ、その上に重ねて五三の桐や十六葉一重菊の幔幕が張られている。草は五色である。釜の周りに笹を持った宮人たちが集まり、竹筒から水を注ぎ入れ、湯立てが行われた（図１５）。湯ばやしは長く続き、なかなか終わらないものだが、最後にいよいよ、湯たぶさで釜の湯を撒く場面になる（図１６）。やがて空が明るくなり、村役場前からバスで東栄駅に戻った（『豊根村誌資料編２』、「奥三河のき山放送局第79回」なども参考にした）。

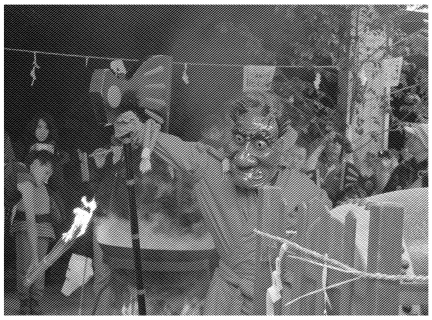

図１４　下黒川花祭の榊鬼（平成３１年1月３日）

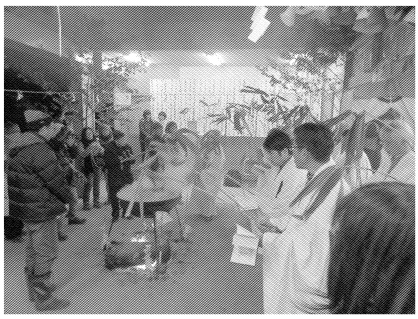

図１５　下黒川花祭の湯立て（平成３１年1月３日）

図１６　下黒川花祭の湯ばやし（平成３１年1月３日）

７．鳳来寺田楽（1月３日）

図１７　東照宮の寅童子（平成３０年1月３日）

鳳来寺田楽は、**黒沢田楽**、**田峯田楽**と合わせて**三河三田楽**と称されている（かつては鳳来町内にも他に祇園田楽（四谷田楽）、大徳寺田楽があり、奥三河全域では更に多数の田楽があったが、大正・昭和年間に途絶している）。鳳来寺田楽の特徴は、田楽衆に鳳来寺が扶持を与えていた点にある。通常の田楽は村落の人々が奉納するため、田遊（稲作の光景を舞踏・歌謡で表現するもの）のように五穀豊穣の祭礼が主体だが、ここでは田楽衆による寺田楽のため、田遊のみでなく国家安穏、天下泰平にまで祈禱が広げられている。田楽の起源は鬼にあった。利修仙人は青鬼、赤鬼、黒鬼に守られていて、仙人を訪ねて来た勅使草鹿砥公宣の前にも立ちはだかり、道案内の童子が追い払ったこともあった。利修仙人が入定する際、将来この山の守護神となるよう因果を含めて、３匹の鬼の首を切って本堂の下に埋めた。この鬼の古事より、毎年正月の３日・１４日に（現在は３日）田楽などをすることになった。かつて田楽は鳳来寺山近辺の各所でも行われていたが、いまでは本堂前の田楽堂でのみ行われている（当日配布資料、『鳳来町誌文化財編』）。

タクシーで９時に鳳来寺に達した。冬晴れだったが山上には薄っすらと雪が積もっている。東照宮で寅童子（徳川家康に因んだ橙色の起上小法師）の御守を買った（図１７）。鳳来寺本堂からは低音の読経と太鼓の音が聞こえる。本堂は陽光を浴び、屋根から雪解け水を垂らしている。軽食屋の女将が、赤い木炭を火おこしでせっせと運び、田楽堂に並ぶ木の火鉢５つにくべている。９時４８分、田楽衆が三々五々やってきた。指導者は白衣を羽織り、舞人は青や緑の狩衣をまとっている。才頭（さいとう）は、全身黄金に輝く装束を身にまとっている。田楽堂では、周囲に白幕が張られ、正面に榊、鏡餅、しん木（男根）、獅子頭、御神酒などが備えられ、それを囲んで一同が座り、舞台の両脇にも榊が、真ん中には太鼓が置いてある。田楽衆は２１人の男性だが、子供から老人までいる。

図１８　鳳来寺田楽（平成３０年１月３日）

配布資料によると、式次第は以下の通りである。御神酒いただき、九度、かんばやし、松竹ばやし、国づくし、五番の舞、万才楽、鶯の舞、佛の舞、御礼、松のらんじ、扇のおがみ、棒のらんじ、棒の祝い、神天子の舞、一、二の舞、惣田楽、ろん舞、面申、次の面申、獅子伏せ、打開き、なりわい、こいのり、鳥追い、苗引きぼこ楽、弓納、田うた。田楽は御神酒を頂く神事から始まった。そのあと一同が草鞋を履き、九度から音曲に入る。大人数で行うものが多い。万才楽は熱田神宮の踏歌神事の影響を受けているというが、一見したところはよく分からない。多様な内容を含んでおり、田遊の要素も少なくはないようだった。神佛習合も目に付く。御礼からは庭田楽といい、才頭が登場した（図１８）。神天子（してんじ）の舞では、桃色の装束の稚児（小学校５年生）が鼓をもって登場した。司会は、山間地での少子化による人材確保の苦労を語った。また参観者には、酒の振舞があった。一、二の舞は、中学生ほどの男子がささらをギシギシ鳴らして舞った。惣田楽は東西を代表する黄緑、青の装束の二人が腹に太鼓を括り付けて登場し、それを含む９人が輪になって回るなど賑やかなものである。まだ祭礼は続いていたが、ろん舞まで見て鳳来寺を後にした。後半では、農耕や生殖（苗引きぼこ楽）が描かれた模様である（「奥三河のき山放送局第18回」なども参考にした）。

８．山中八幡宮の御田植祭（デンデンガッサリ）（１月３日）

山中八幡宮は東海道沿いにある。名電山中駅から東海道を西へ、街道の風情が残る松並木を歩むと、田圃の向こうに石燈籠や赤い大鳥居が見えてくる。大きな楠を過ぎて石段を上がっていくと、そこに朱塗りの社殿が現れる（図１９）。この山中八幡宮には、永

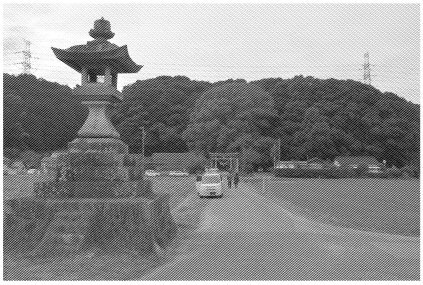

図１９　山中八幡宮（平成２８年１月３日）

図２０　デンデンガッサリ（平成２８年１月３日）

禄６年（１５６３年）に徳川家康が三河一向一揆に追われて身を隠したという「鳩が窟」が、社殿下の土手に残されている。

デンデンガッサリはこの山中八幡宮の御田植祭のことで、年始に三河一円で多く行われる田遊の１つである。昭和初期までは旧正月３日に行われていた。社殿の中心に太鼓を据えて田に見立て、一同が合唱する歌の冒頭に「デーエンデーンガッサーリヤー」という一節があるのでこの名前で呼ばれる。行事は前歌、後歌、せりふ、所作からなる（『新編岡崎市史１２ 民俗』『新編岡崎市史１９ 史料 民俗』）。

１４時前、「舞上八幡宮」との扁額のある拝殿内に、烏帽子を着けた奉仕者１０人余りが着座していた。観客も拝殿内で一堂に会しているので、祭礼が身近に感じられる。神前には巨大な鏡餅が供えられている。１４時、挨拶のあとで奉仕者が太鼓の周りに集まり、「デーエンデーンガッサーリヤー　ハッチキヒライテガッサリヤー」と歌い始めた（図２０）。口伝で伝わってきた文句で、意味が分からない部分も多いが、京、伊勢、松阪、鎌倉、近江、大津といった地名が出てくる。しばらくして小休止となったが、これは農作業の合間の休憩を意味し、人々は口々に弁当の時間だと叫んだ。すると櫃に炊いた白米を入れた役員が登場し、観客にしゃもじで一口の白米を振舞った。観客はそれを手でもらい食した（図２１）。そして再び「デーエンデーンガッサーリヤー」が繰り返される。やがて奉仕者は太鼓の周りに集まり、丸い円盤状の餅を頭上高く掲げ、収穫の喜びを表現した。続いて巨大な鏡餅を収穫物に見立てて、これを牛で運搬する光景が展開される。牛役は注連縄を鉢巻のように頭に巻いた男性で、四つん這いで鏡餅を運ぶが、周囲で別の奉仕者も餅を支えている。この牛役が２回へなへなと倒れ込むが、これは余りの豊作ゆえに牛が重荷に耐えかねてへたばってしまうという演技である（図２２）。

図２１　弁当の時間（平成２８年1月３日）

図２２　倒れこむ牛役（平成２８年1月３日）

社殿内では俄かに鏡割りが始まり、奉仕者が大きな鉈や包丁で餅を細かく四角に裁断していく。巨大な鏡餅を市販の切餅よりも小さくするので、大変な重労働である。観客が社殿内に座って待っていると、太鼓の音と共に三方から裁断された餅が大量に撒かれ、人々はそれを手に入れようと大騒ぎした。狭い空間だけに、普通の餅投げよりも迫力がある。最後に社殿の出口で蒲郡みかんが一個ずつ手渡され、人々は三々五々田圃の畦道を各々の方向へ帰っていった（「街ぶらり～岡崎発見隊」平成２８年２月１～１０日放送も参考にした）。

９．財賀寺の禳田祭（1月３日）

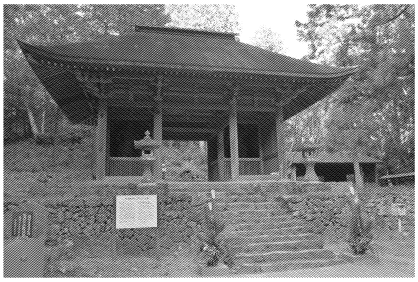

図２３　財賀寺仁王門（平成２９年1月２日）

陀羅尼山財賀寺は、かつては全山数百坊を数えた聖武天皇創建の古刹である。名鉄の国府駅には「聖武帝勅願所　千手観音財賀寺」なる立札があり、そこからタクシーで１０分ほど走ると、田園から山中に入っていく。檜皮葺の仁王門が見えて、次いで瓦葺の文殊堂や本坊が見えてくる（図２３）。本坊前では、鏡餅を細断したものが参詣客に振舞われている。銅板葺の総本堂はそこから更に山を登ったところにある。木造の古く大きい建築物で、到着したときには、人々が開けているところだった。格子の向こうの内陣には黄金の千手観音が安置されており、周囲に諸佛や明王の像が並んでいる。格子の手前の外陣には畳が敷かれ、厨子に大黒天が鎮座している。

図２４　禳田祭の田畷（平成２９年1月２日）

この財賀寺では、1月３日（元来は1月５日）に禳田祭（御田植祭、田遊祭、田楽祭とも）が行われる。寺伝によると、源頼朝が源平合戦での勝利を財賀寺で祈願し、壇ノ浦の勝利のあとで頼朝自らが普請を監督して仁王門を寄進したが、その竣工落慶のときから禳田祭が始まったと言われる。配布された資料「禳田祭発祥要旨」によると、財賀寺の御田植祭で奉仕する「役人達」（やくうど）１１人は、祭礼開始当時から続く古い家系の嫡長男だけからなっている。１１人が７人になるまで新たな補充はしないという規律がある。この１１人が身を清めて祭礼に臨んでいる。役人達は以下の構成となっている。司祀（太夫：祭礼の主人公）１人、田畷（奉行：田を見廻る役人）１人、田夫（農夫）３人、撃鼓（太鼓を叩く人）１人、携樽者（酒樽を持って出る人）１人、饂者（田に弁当を運ぶ人）１人、為負児婦者（幼児を背負う女）１人、為摧者（白牛になる人）１人、駆牛者（牛を使う人）１人。見学した範囲では、その年代は様々であった。祭礼は、格子の手前の畳張りのところで行われる。中央に太鼓が叩く面を上にして置かれ、これが太鼓として使われると同時に、田圃をも表現する。そこに苗が植えられるわけだが、苗は杉の葉で表現される。

図２５　禳田祭の牛（平成２９年1月２日）

財賀寺の禳田祭で目に付くのは田畷と白牛だろう。田畷は裃を身にまとい、直径一尺ほどの白く薄く丸い餅の中心を棒に突き刺したもの（奉行の傘を表現する）を肩に担いで登場する（図２４）。白牛は、為摧者が大きい木製の牛面を持って表現され、代掻きなどを行う。牛が重荷に耐えかねて倒れるという動作はない（図２５）。

禳田祭が終わると菓子や赤飯が振舞われた。菓子は煎餅で、赤飯は中央の太鼓の上に櫃が乗

図２６　禳田祭の赤飯振舞（平成２９年１月２日）

せられ、役人達が葉の上に少量を乗せて振舞うのである。このとき為負児婦者が木偶児を持って現れた。この木佛には着物を着せるが、自分の子供が小さい人がこの木佛に着物を着せると、子供が強くなると言われる。また子供のない婦人がこの木佛を抱くと、子宝に恵まれるという。この木佛は着物を着ていたので分からなかったが、裸にすると子供に似合わず最高潮の男根を有しているといわれる。

１０．熱池の御田植祭（てんてこ祭）（１月３日）

西三河の**幡豆郡福地村大字熱池**には、貞観元年（西暦８５９年）の清和天皇の大嘗会に際して悠紀齊田が設けられた。『熱池八幡社御田植神事由来』によると、熱池（にいけ）はもと贄池と書き、神饌を調理した御料地の意味だった。この地には八幡大菩薩大明神が祀られたが、明治の神佛分離で八幡宮となり、「宮」号使用が制限されて**八幡社**になったという。同社の**御田植祭**は**てんてこ祭**とも呼ばれ、赤装束の厄男が大根で作った男根を腰に付けて振るという独特の行事で知られる。

図２７　厄男の行列（平成２７年１月３日）

図２８　大根で作った男根（平成２７年１月３日）

昼過ぎに名鉄福地駅から歩いていくと熱池が見えてきた。立派な長屋門も残る集落で、熱池町公民館には紅白の鯨幕が張られ、「奉獻正八幡社」の白い幟が立てられている。狼煙の音が響く広い田圃の一角に八幡社の小さな森があり、「清和天皇悠紀齊田舊蹟傳説地」の石碑がある。露店では、この日のみの縁起物である男根の土産物（てんてこおこし、てんてこ鈴）や土鈴の小締太鼓などを売っている。拝殿の解説によると、赤装束は聖なるものを示し、顔を隠すのもマレビト（神）の印で、かつて奉仕する厄男は一週間こもり堂で潔斎したという。拝殿には大根の男根が３つ用意されている。

一端神社に集まった奉仕者は、改めて集落に入って行列を組み、衆人が見守るなか神社へとゆっくり歩んだ。紋付袴の先駆（塩まき）、束帯の神職、紋付袴や背広の集落の代表、全身赤装束に白足袋の厄男（６人）という構成で、全員男性である。厄男は前から小締太鼓、飯櫃、茶樽・なます・生魚（天秤棒で運ぶ）、竹箒（３人）を持っている。食べ物は、田植えの際の昼食を意味する。先頭の厄男が小締太鼓を「てんてこ、てん」と軽妙に叩くのに合わせ、前の３人（前厄が担当するのが習い）が腰（前ではなく尻の上）に付けた男根をユーモラスに振る（図２７・２８）。大きく力強い男根は生命力を表すという。一行は八幡社に着くと男根を拝殿の柱に括り付けた。拝殿の柱にはまた、目刺しにした鯛２匹と注連縄とを組み合わせたものが飾られている。拝殿前に出てきた厄男たちは、境内を回って田植えの動作をして、箒で藁灰を撒き散らした。この灰を浴びると、厄除けになるという。隣の御鍬社は閉扉され、蜜柑や干柿を飾った門松で飾ら

れている。神事で田植え歌のときになると、集まった人々は配布された松葉を拝殿に投げ込んだ。松葉は苗を表現したものである。人々には、白米と紅白なますの振舞があった。神事が終わると、厄男による餅投げになった。この餅投げでは袋入りの餅を投げるが、当りのときは更に景品をもらうことができる。６個獲得した紅白の餅のうち、白餅１つに金色の紙が入っており、北海道産ゆめぴりかの精米２kgをもらうことができた（三河放送局「天下の奇祭　てんてこ祭　－西尾市－」も参考にした）。

１１．上黒川花祭（1月３・４日）

１月３・４日には、**北設楽郡豊根村上黒川**で大入系の花祭が行われる。上黒川花祭は元和の頃にはすでに記録があり、江戸時代には開催日は１１月１４日だった。１６時半過ぎに飯田線東栄駅に着き、予約したタクシーに乗った。花祭を見るのはこのときが最初だった。東栄町の本郷を走り抜け、北上していく。狭い林道を抜けると、そこに豊根村が開けてくる。１７時過ぎ、上黒川花祭の花宿である、山際の熊野神社に着いた。そこには趣のある木造の古い舞堂があり、なかでは焚火に五徳が置かれ、大きな釜で湯が沸かされていて、宮太夫たちが祈禱を読み上げ、釜祓い、湯立てを行っているところだった（図２９）。舞堂の木の壁には奉納者の名前が張り出され、一角には神座が、別に一角には炬燵が置かれていた。やがて撥の舞、式さんば、順の舞と進み、鎮に入った（図３０）。神座に太刀一振、面一つと舞楽用のような烏帽子一つが置いてある。舞子が２人現れ、面、烏帽子を着け舞い、やがて宮人一同が並び、各方面を向いて祈った。やがて地固めの舞、宝の舞、花の舞、いちの舞が続いた。真夜中に三つ舞、四つ舞と交互に山見鬼、榊鬼が出て、やがて巫女と婆（ばばあ）というのが出てくる。巫女を先導し、婆が味噌のついた擂粉木を振り回して防衛するのである。湯～らんどパルとよねに行ったり、炬燵で寝てしまったりした部分も多かったが、湯囃子は見ることができた。まだ舞が続いていたが、東栄駅に向かう新年最初の村営バスが出るので、大きな茅葺屋根の熊谷家の前からバスに乗った（花祭り保存会『上黒川熊野神社花祭り』も参考にした）。

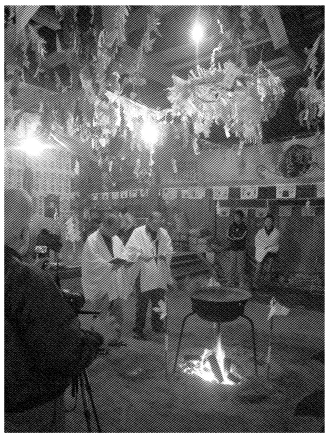

図２９　上黒川花祭の釜祓い・湯立て（平成２４年1月３日）

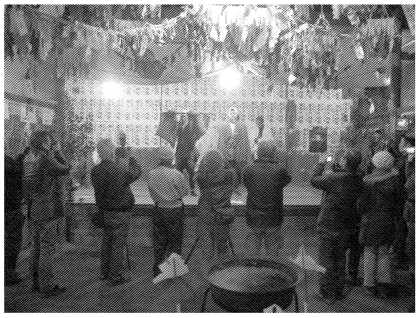

図３０　上黒川花祭の鎮（平成２４年1月３日）

１２．大谷御神楽（1月３・４日）

北設楽郡富山村は「日本で一番小さな村」であった。佐久間ダムができて一部村域が水没したが、いまでも湖岸に一部の集落が残っている。そこには鉄道で行くことができる。飯田線は愛知県内最後の東栄駅を出ると静岡県内に入るが、長いトンネルを過ぎて、佐久間ダムの湖岸に

ある大嵐（おおぞれ）駅に着く。駅前に長い吊り橋があり、それを渡るとそこは富山村である。その富山村も、いまでは北設楽郡豊根村に併合されて今日に至っている。

富山の大谷集落の**熊野神社**では、毎年１月３日・４日に**御神楽**が奉納される。これは湯立神事の一種で、花祭と起源を同じくするというが、式次第は異なっている。かつては富山村の５地域で同種の行事が行われていたが、いまでは大谷地区でしか残っていない。

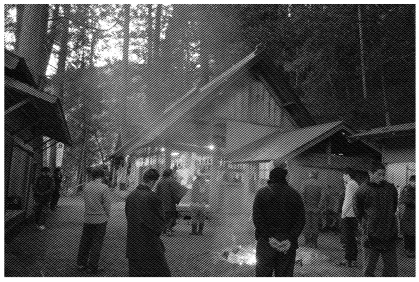

図３１　大谷熊野神社（平成３１年1月３日）

大嵐駅に着いたのは１月３日１６時過ぎだった。冬晴れで、山々の頂はまだ輝いているが、山肌にはもう暗い陰が差していた。大嵐駅は東京駅を模した煉瓦風の新しい駅舎で、寒気を防ぐ待合室も手洗所もある。待合室には富山村の歴史を語る富山村教育委員会の額がいまも掲げられ、住民の郷土愛が窺い知れる。それによると、「大嵐」という珍しい地名は山崩れを意味するという。大嵐駅を出て、吊り橋を渡って富山村に向かった。駅の前には自由に利用できる無料自転車が並んでおり、帰り際にそれに気付いたが、行きは気付かず歩いてしまった。長い吊り橋を渡っていくと、冬のダム湖から寒気が上がってくるのを感じた。自動車道に沿って歩き、ダム湖に突き出た半島を越えて富山に至るには、徒歩で３０分弱かかった。この途中、自動車にも人にも出会わなかった。大谷の集落に入ると、かつての富山村役場である豊根村富山出張所があり、駐在所、郵便局が並んでいる。あちこちで「富山村」を俄かに「豊根村」に書き換えた形跡があり、「富山村」と書いたブルドーザーも停まっていた。集落に入っても人には出会わなかったが、高い方に白い幟が翻っているのが見えた。そちらの方角に進んでいくと、家々の間を通る細い道から警官が降りてきた。その道を上っていくと、家々のあとに茶畑が続き、やがて熊野神社が見えた。到着したのは１６時３５分だった。陽はいよいよ落ちてきた。

熊野神社は大木が並ぶ急斜面の森のなかにある。山肌のため奥行きを深くとることができないのか、横に長く木造の建物が伸びている（図３１）。この建物は覆いで、幾つかの神社の本殿がそのなかに横並びに鎮座している。中央が熊野神社である。その向かって右に舞処（まいど）が広がっている。つまりそれは本殿の前ではなく、横に設けられているのである。それは土間ではなく板張で、御神楽もその上で行われる。その一部に竈が設けられており、釜から湯気が盛んに立ち上っていた（図３２）。舞処の一角には、二ノ宮と呼ばれる神社がある。舞処の奥は社務所になっており、炬燵や囲炉裏が置かれ、人々が集っていた。熊野神社に向かって左側は人々があまり行かない領域であるが、諏訪神社が鎮座している。かつて佐久間ダムに水没した富山村河内集落のものを、水没しなかった大谷地区の熊野神社の地に移転したのだという。富山村教育区委員会の現地説明版によると、水没した山中地区の熊野神社、佐太地区の熊野神社も合祀されているというが、同じ熊野神社だからだろうか、諏訪神社のような別箇の社殿は見当たらなかった。

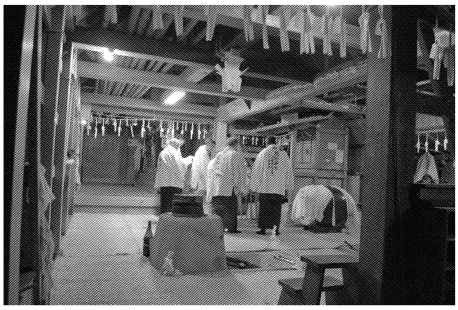

図３２　大谷御神楽の舞処（平成３１年1月３日）

到着したとき、熊野神社では神事が始まろうとしていた。熊野神社の祭壇前には大きな巴紋の入った白い幕が張られている。集落の男たちは、老人から若者まで、大半が紺の着流し、羽織、草履の姿で、舞処の右横にある庭の焚火の周りに集まっている。訊ねてみると、別に決まりはないのだが、皆この羽織姿で集まるのだという。この庭の周辺には小屋が２つある。１つは消防団員の詰所で、木炭などの倉庫のようになっていて、板張の床には薦が敷かれ、囲炉裏も２つあって赤々と炭が燃えていた。もう１つの小屋は売店で、三人娘が背に「富」と染め抜いた法被を着て、おでん、うどん、ビール、熱燗を提供している。地元の特産品も販売され、白餅、栃餅、草餅、こきび餅、「たかきび」、「宮下り」（紅白饅頭）などが見られた。坊主刈りの小学生が売り子をしていたので、富山の住人かと尋ねてみたら、新城に住んでいるとの返事だった。１７時少し前、神事が始まった。一人の男が酒を含み、薦の上に吐いて場を清めた。３０人ほどの男たちが舞処に上がって正座した。彼らは祭壇と正対するのではなく、その横に座る形になっている。神職が警蹕と共に祭壇の扉を開けると、皆が一斉に平伏した。祝詞が奏上され、総代が玉串を捧げた。

図３３　大谷御神楽（平成３１年１月３日）

すでに漆黒の闇となった１７時半、神事が終わって舞の始まりかと思われたが、ここで一同は１時間の夕食に入った。多くの者は自宅に戻ったようだった。関係者によると、実はこの日はもう９時から一連の行事を行ってきたという。二ノ宮の前に、木製の額が掲げられている。「御祭礼次第　一、主連のはやし　一、清めの御湯　瓶子巻　一、宮清め　ごしんご供え　一、天狗祭　塞の神祭　不動明王祭　一、式の舞　一、式の御神楽　一、てんでの舞　一、惣氏子の舞　一、権現の御湯　一、立願の御湯　一、ゆげどう　一、上げ湯　一、生まれ清まれ　一、市の舞　一、生まれ清まれの舞　一、湯ばやしの舞　一、伊勢の花の舞　一、どんずく　一、鬼神　一、兄弟鬼　一、祢宜　一、鼻売り　一、虱ふくい　女郎面　一、神返し　一、主連切り　以上　昭和六十年一月四日　奉納　山﨑一司」この山﨑一司は富山村教育長を務めた地元の霜月神楽研究家で、富山村の消滅した御神楽の様子を伝え、伊勢の湯立神楽より以前に熊野信仰が花祭の形成に影響したことを強調している（『隠れ里の祭り』、『花祭りの起源』、『「花祭り」の意味するもの』、『山内の花祭り』など）。なお上記の神事が式次第に出てこないが、これは明治維新後に付加された「祭典」だという（山﨑一司『熊野神社の御神楽祭り』）。

１８時半ころから長老６人による湯立の儀式が始まった。一同は竈の周りで、次いで二ノ宮の前で祈禱文を読み上げた（権現の御湯・立願の御湯・ゆげどう）。続いて高校生くらいの男子４人が、白い幣を付けたヤチを手にして現れ、舞い始めた。威勢よく回り、花祭の四ツ舞を思わせた（湯ばやしの舞：図３３）。だがここで時間となった。１９時半過ぎの飯田線で帰るために、ここで失礼した。漆黒の闇を大嵐駅まで歩いた（「奥三河のき山放送局第 18 回」なども参考にした）。

１３．篠島の正月祭礼・大名行列（1月３・４日）

知多半島沖の**篠島**では、１月３・４日に**正月祭礼・大名行列**が行われる。これは前浜（ないば）に面する八王子社に祀られている男神オジンジキサマが、前浜から少し入ったところにあ

る**神明神社**に祀られている女神の所へオワタリをして一夜を過ごし、**八王子社**に還幸するという行事である。オジンジキサマは１月３日夕方にオワタリ（「お渡りさま」とも）をし、１月４日昼にオジンジキサマが八王子社へ帰る際には、島の男たちが大名行列を構成して供奉するのである。

篠島に着いたのは１月３日の１３時４５分頃であった。八王子社に近い、前浜に面した旅館の２階からは、浜辺の景色が一望できる。しばしそれを堪能していたが、入浴後に横になって眠っているうちに、１７時を過ぎて夕闇が迫ってきた。オジンジキサマのオワタリは１８時である。オワタリは庁屋の人と呼ばれる精進潔斎した関係者により行われる。全島の電気がこのオワタリの最中に遮断され、漆黒の闇のなかをオジンジキサマが渡御する。この２階からはよく見えるはずだが、島民も来訪者もその様子を見ると祟りがあるといい、窓にはカーテンが閉められる。１８時ちょうどにテレビも暖房も電燈も切れた。毛布をかぶってじっとしていた。波の打ち寄せる音だけが聞こえた。

かすかに威勢のいい太鼓の音が聞こえてきた。と思ったら電燈が復旧した。１８時１９分である。太鼓の音を聞いて、島民は神明神社に参拝を始めた。この参拝は早いほど御利益があるという。神明神社は旅館からも歩いて２分ほどである。電気は通じたが、島の夜は暗い。神明神社は、大勢の人で賑わっていた（図３４）。だが集落の狭い通りに面しており、露店の類はない。太鼓が鳴り続けるなか、人々は神所に収められたオジンジキサマを拝んでいる。それは全体が神垂（シデ）と呼ばれる白い和紙に覆われた、直径１米ほど、重さ６０キログラムほどの大きな塊である。神垂に覆われたそのご神体は、よく見えないが獅子頭だという。オジンジキサマの参拝のあと、人々は社務所で御神酒と米を受け取って食し、更に道を隔てて反対側の六兵衛観音なる観音堂にも参詣した。民宿に帰り、大女将に参詣のことについて聞いたが、この参詣は男がするもので、女の自分はしたことがないと述べた。

図３４　篠島の神明社（平成３１年１月３日）

１月４日は６時半に目が覚めた。旅館２階からは朝のすがすがしい景色が見え、すでに空が赤くなり、細い月や明けの明星が空に輝いている（図３５）。人々は早くも散歩や朝の準備で歩き回っている。７時過ぎ、向かいの渥美半島から太陽が顔を出したころ、神が不在の八王子社から２０人以上の中年男たちが前浜に出てきた。彼らは結界が張られた前浜に出て、白い軽トラックで次々運ばれてくる空の木箱を、無造作に砂浜に積み上げた。次いで八王子社前の浜辺に笹を立て、穴を掘り始めた。穴は２箇所で、特に海側のものを深く掘っている。穴はやがて、人の腰ほどの深さにも達した。この間、神明神社前の浜辺では、庁屋の人らしき男たちが、２人ずつ白い着物をまとって、木桶に水を入れて現れ、海に向かっていった。彼らは水際で猿股一丁になると、海に入っていき、どぼんと頭まで海水に浸って禊をし、仕舞に浜に上って木桶の水を被って、白衣を着て神社に戻っていった。８時前、男たちが八王子社から「オタナギサマ」（御棚木様）と呼ばれるものを浜に引き出した。オタナギサマとは、高さ４米あまりの

図３５　篠島の夜明け（平成３１年１月４日）

モチノキを３本並べ、グミ１本、ヒサカキ２本をそのなかへ紛れ込ませたものであるという。こうして白砂の上に、突如として常緑樹が出現したのだった。

晴天のもと、１０時に神明神社に参拝した。すると大名行列で奴を演じる高校生たちが、その装束で集まっている。髪を紫や赤に染めている者もいる。その周りにはその母親たちがいた。そこで、大名行列は何時からですかと問うと、１１時半からだという返答だった。少し時間があるので、島を散歩することにした。前浜を過ぎて島の先端に達すると、そこには南洋風の木々が生い茂る森がある。その奥に、かつて名古屋城の建材として石を切り出したあとが残されていた。岩に杭の跡が残っている。またこの付近には、島弘法といって弘法大師に見立てた地蔵が各所に立っている。これも見学して、神明神社の方へと戻っていった。

まだ１１時前だったが、神明神社前の前浜にはもう多くの人々が集まっていた。大名行列の開始である（図３５）。行列を構成するのは全員男性で、５つの年齢集団である。（1）還暦の人々。黒の紋付に青の裃を着て、鉾を持つなどして、行列の各所で監督役をしている。（2）厄年の人々。着物の上に深緑の羽織を着て、日本の脇差を腰に付け、帯から瓢箪を下げ、顔に隈取をしている。髪を緑などに染めた者もいる。羽織の背に、家紋の代わりに「八」の字が書いてある。最近は本厄（数え４２歳）の人々だけでは人数が少ないため、前厄、後厄の人々も加勢しているという。指導者役の２人の恰好は全然違っていて、１人は幼稚園児の水色の上っ張りを着て、「ちゅーりっぷぐみ　なまえ　のんちゃん♡」という名札を付けている。もう１人は橙色のシャツを着ている。（3）高校生。奴の装束に派手な綱を帯び代わりにして、大量の金銀の鈴を腰から垂らし、隈取をしている。（4）中学生。白のズボンに黒の袴纏を着ており、背には紋の代わりに「八」とある。彼らは様々な毛槍を持っている。（5）小学生。錦の陣羽織を着たり、僧兵のいで立ちをしたりしている。隈取もしている。持ち物は弓矢、薙刀。（6）文金高島田の鬘に腰元の旅装束を着た男子２人（中学生か）。

図３５　篠島の大名行列（平成３１年1月４日）

厄年の男たちは早くから酒を飲んでいる。名前が記してある一升瓶がずらりと並んでいた。祭の最中はこれを砂浜に置いて、適宜ラッパ飲みをするのである。まとめて注文したものらしく、市販物のような商標ラベルがなく、「勝鷹組」、「楠電組」のような組名や個人の名前が書かれた紙が貼られていて、美しい模様が付いたものもある。これら瓶とは別に、砂浜に入る前に樽酒の鏡開きが行われ、見物人にも振舞があった。

大名行列が始まった。砂浜に還暦、厄年、高校生の３集団が２列に並んだ。彼らは一斉に舞をし、掛け声を上げる。そして「サイトー」と叫び、相手の列にめがけて砂をかけ、各列から１名ずつ出て相撲を取る。こうした動作が繰り返され、オジンジキサマの到着を待つのである。正午前に中学生、小学生が、高校生に続いて２列に並んだ。僧兵のいで立ちの少年が、高校生が落とした金銀の鈴を呉れた。厄年の指導者がやってきて、戯言の歌を皆に歌わせている。

オジンジキサマの還幸が始まった。神明神社では、正午前から神事が行われているようだったが、長い鳶口を手にして袴纏を着た消防団員たちが周囲を固め、関係者以外を寄せ付けなかったので、その様子は見ることができなかった。１２時５０分、神社を出発したオジンジキサマの一行が、神職の先導で前浜に出てきた。行列がまだ遠いと思われたので、防潮堤を越えて浜に

出るオジンジキサマの通り道の傍らで、規制線の外側に待機してカメラを構えていたところ、周囲の婦人たちが怒り出して、規制線から更に後方に退いて地面に跪くよう言った。一同が恐縮して跪くなかを、オジンジキサマの行列が悠然と進んだ。オジンジキサマは、庁屋の人の成年男子１名が花笠のように頭上に乗せ、両脇に供を従えて進んでいる。このオジンジキサマには白い紐でつながれた小さなオジンジキサマのような帽子があり、これを庁屋の人の少年男子１名（「後の舞」と呼ばれる）が被っている。それに続き、モーニングコートや黒礼服を着た氏子代表たちが続く。一行は２列に並んだ大名行列の間を進み、やがて止まった。大名行列の人々は砂浜で黙って土下座し低頭している。

図３６　八王子社前の大名行列（平成３１年１月４日）

砂浜にやってきたオジンジキサマは、一旦止まって宙を舞った。太鼓に合わせ、それを頭上に乗せた男が振り回すのである。「後の舞」の少年もこれに調子を合わせて飛び跳ねた。オジンジキサマは更に進み、オタナギサマの前まで来て、再び舞った。オジンジキサマはお腰掛けに安置された。ここで宮司がオタナギサマの前で祝詞を上げ、新餅（ニイモチ）を、日の出の方、八王子社の方、北の方へ投げたようだが、よくは確認できなかった。この新餅を受け取ったものは、周囲の人へも少しずつ新餅をちぎって与え、御利益を分け合うのだという。

厄年の男たちが下帯姿となり、火をかけられた木箱の山の横、オタナギサマの前に整列して正座した。オタナギサマの前では、女性神職らによる神事が行われている。やがて氏子総代が「コリヨー」と声をかけると、厄男たちはオタナギサマに飛びかかり、倒れたオタナギサマをそのまま３度引き回して、海へ流した。これにより厄が離れて行くと考えられているので、厄男はこの時に必ずオタナギサマに触れなければならないと考えられている。オタナギサマは大きく、植え付けた穴も深かったので、穴からなかなか引き出されなかった。それでもやがてそれは引き出され、バラバラにされて海に引きずり込まれた。

オタナギサマが海へと流れると、オジンジキサマの一行は八王子社へ向かった。オジンジキサマは、八王子社の前で最後にひと舞いをして、神職や庁屋の人によって本殿に納められた模様である。大名行列の人々は鳥居前に跪いていた（図３６）。人々に続いて境内に入り、参詣すると、オジンジキサマはすでに社殿のなかにあって見ることができなかった。人々は八王子社の本殿、摂社末社を回り、招魂社に詣でて、最後に忠魂碑にも手を合わせて帰った。賽銭はここではお捻りの形で投げられていた。やがて神職、庁屋の人を先頭に、大名行列の人々もまた神明神社に戻り、１４時には解散していった（『愛知県史別編　民俗２尾張』なども参考にした）。

１４．熱田神宮の初ゑびす（１月５日）

熱田神宮の境内南部に鎮座する**上知我麻神社、大国主社、事代主社**では、「初ゑびす」が１月５日に行われる。神事ののち、商売繁盛の大熊手が頒布されるのである。深夜にも拘らず多くの参詣者が訪れるこの行事は、名古屋の冬の風物詩となっている。初ゑびすは県内各地で行われており、例えば砥鹿神社でも１月１０日に「初えびす祭」が行われる。

伝馬町駅に着いたのは１月４日２３時半過ぎだった。酔客が帰宅しようとする時間に、神社に参詣する人がどれほど居るのかと思ったが、どこからともなく大きな熊手を持った人々が多く集まってきた。神宮前には露店が軒を連ねており、どて煮、みそ串カツなど名古屋色が濃い。上知我麻神社は、神宮南門からすぐである。人々は２時からのお焚きあげのために、南門に設けられた納所に昨年買った大熊手を納め、境内に入る。社殿では神事の最中だった（図３７）。社殿前の人々は益々多くなっていき、多数の警察官、警備員が配置され、仮設櫓の上では警察の指揮官が陣取っていた。２３時５０分ころになると、大熊手を販売する社務所の前でも神事が行われ、人だかりも相当なものになった。社務所内には、２０人ほどの白衣の男たちが、販売開始の合図を待っている。

図３７　上知我麻神社での神事（平成２８年１月４日）

１月５日０時、歓声と共に人々はどっと社務所に押し寄せた。熊手は、最大のものは５万円の「福熊手（特製）」、最小のものは２千円の「あきないえびす」（商業者用）、「ちからえびす」（農業者・勤務者用）、「はたらきえびす」（年輩者用）である。社務所前では、１万円札を握りしめた手が無数に突き出されている（図３８）。白衣の男性たちはこの紙幣を掴みとって、大熊手を渡していく。人々は我先に買おうと群れているが、混乱はない。熊手は、中央に米俵を配し、その左右に一対の鯛が踊っている。米俵の上には桝があり、そのなかに恵比寿大黒の像が納められている。更に恵比寿大黒の絵馬も付してある。大判小判や松葉も配されている（図３９）。購入できた人々は、それを担いで嬉しそうに家路を急いでいた。

図３８　突き出される一万円札（平成２８年１月５日）

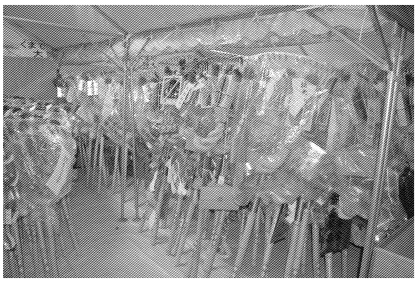

図３９　初ゑびすの熊手（平成２８年１月５日）

１５．伊文神社の七草粥（１月７日）

七草粥は正月７日に七草が入った粥を食する習慣である。七草とは、スズナ（大根）、スズシロ（蕪）、ハコベ、ナズナ、ゴギョウ、セリ、ホトケノザであるが、地域によっても異なる。七草を刻む際に「七草ナズナ、唐土の鳥が、日本の土地を、渡らぬ先に、ストトントントン」と唱えるのが一般的だが、愛知県内では多少異なる唱え言葉をすることもある。春日井市松河戸では、「ナズナ七草、唐土の鳥が、日本の国へ渡らぬ先に、合わせてホトトートー。ホトトートー」などと言い、日間賀島では「七草なずな、トウトの鳥は、日本の土地へ、渡らぬように、ホトホト・・・」などと唱えるという（『愛知県史別編　民俗２尾張』）。

西尾の**伊文神社**（いぶんじんじゃ）では、毎年参詣者にこの七草粥が振舞われる。西尾口駅から南西へ進み、中部電力の送電施設を通過し、「北浜川悪水路」にかかる東渋橋を渡ると、田圃の向こうに森が見えてくる。だが間に家並みがあって、森には直接は近付けない。秋葉神社を横目に森の南端に回り込むと、「郷社　伊文神社」の社標が立てられた入口が見えてくる。ここから森のなかを拝殿へと進んでいくのである。掲示された社伝によると、当社は平安初期に創建だという。文徳天皇の皇子八條宮が渥美郡伊川津より西尾に移った際、天王社（現在の伊文神社）、八幡社（現在の御劔八幡宮）もこの地に移った。当時は宮町（当時は伊文（いも））に祀られたが、後醍醐天皇の時代に現在の伊文山（いもやま）に移った。社号は伊文山天王、伊文山牛頭天王、伊文社、伊文天王などとなり、明治元年に伊文神社となった。祭神は文徳天皇、素盞嗚尊、大名牟遲尊（つまり大国主命）である（現地掲示板、『愛知縣神社要覽』）。

図４０　伊文神社の七草粥　（平成２９年１月７

七草粥の振舞は社務所内で行われていた。コンクリートの建物で、入口に「七草粥接待所」なる看板が立っていた。靴を脱いで上がると、広間に大勢の人々が集まっている。割烹着姿の地元婦人連が、プロパン・ガスをつないだ２つの焜炉に大きな鍋をかけて粥を煮ている（図４０）。粥は白い容器で、一つまみの漬物を上から振り掛けて供される。参詣者は並んで、台の上に乗せられた粥を受け取るのである。テーブルには３０人ほどの老若男女が席を占め、みな家族連れでこの行事を楽しんでいる。邪魔にならないように部屋の端で七草粥を堪能した。七草粥はやさしい味で、疲れ気味の体ではほどよい昼食となった。ふと気が付くと、１人の幼児がじっとこちらを見つめている。こちらが手を挙げると、向こうも笑って手を挙げて応えてくれた。

１６．佐久島の八日講祭（1月８日）

佐久島は三河湾の島である。知多半島沖の日間賀島、篠島と近いが、やや離れてもいる。日間賀島、篠島は三河国を離れ、伊勢国、志摩国、尾張国などに移ったが、佐久島は一時志摩国の影響下にあったものの、結局は三河国幡豆郡に留まり、昭和２９年に幡豆郡一色町に編入され、平成２３年に更に幡豆郡一色町・吉良町が西尾市に編入された。３つの離島はいずれも過疎化が著しいが、佐久島は特にそうである。佐久島は住民の生活中心の島であるために、古い風情をよく残しており、また最近では現代美術の作品が点在する芸術の島としても知られている（『愛知県史別編　民俗２尾張』など）。

この佐久島にある**八劔神社**（はっけんじんじゃ）では、正月８日に**八日講祭**（ようかこうさい）が行われる。この祭礼は宝暦６年（西暦１７５６年）以前から行われているものだともいうが、明和２年（１７６５年）３月に当時の八劔明神の神主筒井長太夫が懇請して神祇管領学頭代官清仁親王２２伝正脉臼井帯刀より秘伝で授けられた『和軍弓箭伝』によるところが多いともいい、その原型は氷岐女鳴弦（ひきめ（＝蟇目）めいげん）、つまり鏑矢や弦を鳴らすことで、悪魔を退散させるという行事である。島人の災難を除き、その幸福を願

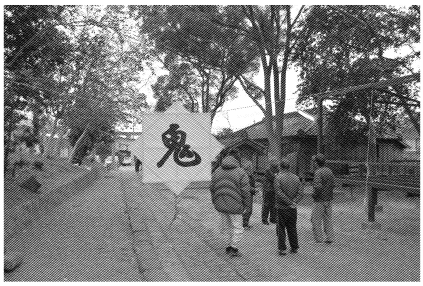

図４１　八劔神社の鬼張秡　（平成２９年１月８日）

って、八日講員１６人（東部落（里）から８人、西部落（一色）から８人）が氏神の前で鬼凧及び弓矢を作成し、３尺４寸四方の杉板を骨とする鬼張秋（八角凧）を吊るして弓矢で射るというものである（幡豆郡一色町教育委員会の境内掲示（昭和５２年）、『一色町誌』）。

名鉄西尾駅からバスで３０分足らずで一色港に着き、そこから船で２０分ほど行くと佐久島西港に着く。西港には人影がなく、船もまばらで、商店も旅館もなかった。付近には黒壁の木造家屋が並び、「日本の原光景が残る島」という港の看板とよく合っている。崇運寺や黒壁の集落を見て、フラワーロードと呼ばれる島の中央道を東へ進むと、「佐久島クラインガルテン」が見えた。Kleingarten とは土いじりが楽しめる耕作地を備えた週末用の小屋を指すドイツ語だが、ここのは立派な別荘で、居住が重視されている印象があった。南洋の灌木が生えた裏山に入ると、そこにはひっそりと白山社が鎮座している。佐久島小中学校の前を通って里に移ると、そこには八劔神社、阿弥陀寺などの寺社や、若干の民宿がある。阿弥陀寺の如意輪堂の隣の道を「富士山」（ふじやま）の方向へ入っていくと、森の奥の奥に浅間神社がある。東港前の大島は、海釣りの拠点となっている。同じく東港前の、島内東南の端にある筒島では、辨財天が祀られている。近くにはほのかに紫がかった砂浜が広がる新谷海岸（にいやかいがん）もある。なお島の各地には無数の弘法大師の厨子があり、４月には弘法祭が行われる。この島の弘法大師は、煉瓦造や現代美術の厨子に鎮座しているので、あまり佛教的な、民間信仰的な感じがしない。

八日講祭は８日１０時半に始まる神事を中心とする。前日に佐久島に入って一泊することにした。７日は晴天だったが、８日は曇で、雨が迫っていた。８時半過ぎに八劔神社に向かうと、そこでは錆びた古いドラム缶で、松飾や廃材が燃やされていた。この時間に集まった人々の大半は年配の男性だが、１人だけ若い女性がいた。聞いてみると、この島出身で、いまは島外に住んでいるが、この祭礼を機に帰郷したのだという。境内の社殿は、拝殿から摂社、末社に至るまで開扉された。拝殿には「八劔神社神明社合殿」との額が掛かっており、奥に見える小さな本殿は２つに分かれている。拝殿前には、神事で用いる破魔矢、破魔弓が置いてある。矢は紙製の羽根を持つ頑丈なもので、弓は普通の細竹をやや曲げただけで麻の弦を張ったものである。鳥居から拝殿までの石の参道には、参道を横切る形で綱が渡され、真中に「鬼」と墨で大書された八芒星の白い凧が、社殿に向けて吊り下げられた（図４１）。綱は、一方は参道の木に、もう一方は餅投げ用の鉄製舞台の屋根に結ばれている。凧の下には、短く太い注連縄がぶら下げられている。やがて鳥居の内側にテーブルが出され、甘酒や冷酒が振舞われ始めた。冷酒はとりわけ、安城の地酒「神杉」である。

図４２　八劔神社の三角膳　（平成２９年1月８日）

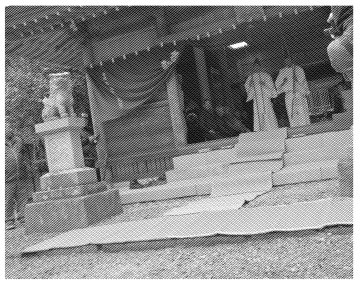

図４３　登場する八劔神社の射手（平成２９年1月８日）

９時過ぎ、突然島内放送が始まった。大音響で演歌が流れ、続いて次の口上が何度か繰り返された。「町内会より住民の皆様にお知らせいたします。八日講の神事を１０時３０分より行います。そのあとに餅投げを行いますので、多数お参りを頂けますようお願いを致します。」１０時

になると、「村社　八劔神社」の社標前に引き出された太鼓を、小学生たちが元気よく叩き始めた。佐久島の太鼓は特徴的で、桴の形状が野球のバットのようで、握りが細くなっている。立って叩く大太鼓（長胴太鼓）だけでなく、正座して叩く締太鼓もある。太鼓叩きには男女の別がないらしい。社務所では、地元婦人連が直会の準備を始めていた。ここでの直会は食事が少し変わっている。三角膳といって、一辺３０糎ほどの三角形の膳に、２つの椀と１つの皿が並んでいる。その内容は、あさりのむき身入りの米飯（左の椀）、あさりのむき身・豆腐・葱の汁（右の椀）、大根漬（後方の皿）となっている（図４２）。ただこれでは現代人の昼食としては足りないようで、直会会場には普通の弁当が並んでいる。古来の風習に従った三角膳は、ただ縁側に１つ備えてあるだけだった。元来は、講員８人が三角膳、神職・役職・参列者は普通の四角膳につくのがしきたりだったという。三角膳は「みすま膳」ともいい、五穀豊穣を願い、一切の不浄物を避けるという意味があり、三角畑、三角田は神の祭場だったという（『一色町誌』）。１０時半の少し前には、拝殿で神事が始まった。拝殿では１６人の講員が神事に参加しているが、それ以外の人々はあまりそれを気にしていない。子供は引き続き太鼓に夢中である。

拝殿から参道に丁字に薦が敷かれ、射場を形成している。やがて神官が拝殿から鬼凧に向かい、修祓を行った。これに続き、厄年の男性である、立烏帽子に白い狩衣の２人の射手が拝殿を出て、弓矢を持って射場に現れた（図４３）。大前は、立ったまま甲矢を番えると、「天筆和合楽」と唱えて鬼凧に射かけ、見事貫通して、会衆の喝采を浴びた。落は、「地福開円満」と唱えて射かけたが、すぐ前の地面に落ちた。乙矢は順番を逆にして番えたが、先ほどと同じ言葉を唱えたものの、放つことはなかった。こののち、会衆は一斉に鬼凧に群がって、それをびりびり引き裂いた。その一片を持ち帰ると、厄除けなどの御利益があるという。最後は子供も集まって、餅投げをして終わった。ここでは、軍手やお菓子も餅と一緒に投げる。紅白の餅を２つずつ、軍手を１つ獲得して、神社を後にした（「佐久島／イメージ #3 『八日講祭り』」も参考にした）。

１７．砥鹿神社の弓始祭（1月８日）

延喜式内社の**砥鹿神社**（とがじんじゃ）は、三河国一之宮、國幣小社として知られた。祭神は大己貴神（つまり大国主命）である。里宮は、飯田線三河一宮駅の近くの森のなかにある。ここは大昔には豊川沿岸であった。奥宮は、三河一宮駅から遠望する本宮山の頂上付近にある。この２つの社殿は宝飯郡一宮町にあったが、現在は豊川市に編入されている。砥鹿神社は神佛習合の時代には「砥鹿大明神」「砥鹿大菩薩」などとも称した。かつて神主を世襲した草鹿砥家は、勅使として東三河に下向した公宣の末裔と称し、他にも禰宜などが二十数家あったという。

図４４　弓始祭の的（平成３０年1月８日）

弓始祭（ゆみはじめさい）は、**砥鹿神社里宮**で毎年１月８日に行われる祭礼で、「算木餅」という棒状の紅白の神饌を神前に供え、２人の射手が真榊で作られた黒木の弓で鬼に見立てた的を射て、年中邪気退散を願う行事である。「武佐弓初之祭」、「ぶさ祭」、「武射祭」などという表記もあり、佐久島の八日講祭、熱田神宮の歩射神事などとの連続性も看取される。かつてはこの

儀式に賞品をかけたこともあったという。

飯田線三河一宮駅を降りたのは９時半であった。里宮までは５分ほどである。雨天で道行く人は少なかった。大鳥居には大きな日章旗が飾られ、初詣の形跡を残していた。参道を通っていくと、弓道場は射会の最中で、ちょうど金的が行われているところであった。そこを通り抜け、門をくぐって、摂社「三河えびす社」の前を通ると、そこに里宮拝殿があった。

拝殿前から表神門まで石畳の参道が伸びているが、その途中に仮設の塀が拝殿と向かい合って立っている。この塀には上部に笹が飾られ、葉が左右に靡いている。塀の中央からやや右によったところに、上から２匹の鯛が、口のところを繋がれてハの字にぶら下げられている（掛鯛）。塀の中央部には、白い紙の的がかけられている。的は縦長の長方形で、中央に黒い丸が描かれ、その上下に「鬼」の上の点を除いた特殊文字が毛筆で書かれている。下の文字は普通だが、上の文字は逆さまである。この日は雨が降っていたので、的は祭礼時までビニールで保護されていた（図４４）。

１０時前、表神門付近の太鼓楼で太鼓が打ち鳴らされ、拝殿で神事が開始された。神職、射手２人、弓道会幹部が拝殿内に入り、最前列に座った。射手は黄土色の素襖の上着を、弓道の黒い着物の上にまとっている。次いで道着姿の弓道会会員も徐々に集まってきた。

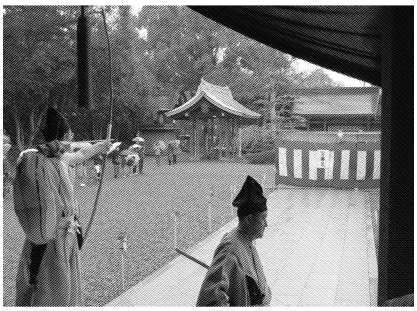
図４５　砥鹿神社弓始祭（平成３０年1月８日）

神事が一段落して、射手や神職が拝殿前に出た。拝殿正面に射位として薦が敷かれている。射手２人はここに前後に座った。神職はその横の床几に一列に腰かけた。射手は、通常弓道で用いるような竹矢を一手（甲乙２本）持参している。弓は榊の丸木弓で、形も元の木の姿を残し、握皮は紙で作られているが、弦は通常の弓道のものが張られている。射手は胸紐を外して肌脱ぎをし、通常の作法通りに一手を行射した。２人は７０前後と見える男性で、寒気にも拘らずなかに着衣せず見事に肌脱ぎをした。丸木弓は扱いにくいはずだが、２人は熟練していると見えて、的に見事に的中させ、周囲からは喝采の拍手が上がった（図４５）。行射が終わると、一同は拝殿内に戻り、神事の続きを終えた。矢や的を奪い合うという光景は、ここでは見られなかった。雨のなか、集まった人々は三々五々去っていった（『三河國一宮砥鹿神社誌』なども参考にした）。

１８．熱田神宮の踏歌神事（オベロベロ祭）（1月１１日）

熱田神宮は「三種の神器」の１つ「天叢雲剱」（または「草薙剱」）を御神体とする神社である。日本武尊が薨去したとき、その妃がその所持していた草薙剱を御神体として創建したのが起源だという。かつてこの神社では、源義朝が熱田神宮大宮司の娘由良御前との間に源頼朝を儲け、織田信長が桶狭間での決戦前に参拝して戦勝を祈願した。熱田神宮は尾張国三之宮であったが、明治以降は官幣大社とされた。本土決戦が準備された際には、米軍の伊勢湾上陸に備えて、御神体は飛弾まで避難した。いまも勅祭社であり毎年６月に勅使参向がある。愛知県内では単に「神宮」とも呼ばれ、「神宮前」、「神宮西」という駅もある。かつては「熱田神社」などとも称した。明治時代に伊勢神宮（「三種の神器」の１つ「八咫鏡」が御神体）に倣って神明造に改築される以前は、熱田神宮は尾張造という地域特有の構造をしており、また神佛習合時代には神宮寺が

あって、名古屋空襲までは鎮皇門という楼門も存在していた。熱田神宮は初詣の参詣先としても人気がある。境内の「宮きしめん」や「きよめ餅」も名物である。

この熱田神宮の本宮・八剱宮・大幸田神社（おおさきだじんじゃ）で、１月１１日に毎年**「踏歌神事」（オベロベロ祭）**が行われる。この神事は、神佛分離まで神宮寺で正月５日から１０日まで行われた修正会の後宴として、熱田神宮の三社へ奉納されたものである。かつて大幸田神社は、神宮寺のなかにあった。この神事の祭員は１３人の熱田神宮神職で、その役割は詩頭（じとう）、陪従（べいじゅう：５人）、笛役、高巾子（こうこうじ）、舞人（４人）、雁使である。舞人は小忌衣に巻櫻冠を着け、太刀を佩く。詩頭・陪従・笛役・高巾子は斎服、雁使は麻布衣を着用する。舞人は採り物として、右手に卯杖という５尺３寸の樫の白木の杖を持っていて、その上の部分は奉書で包んであるが、この卯杖で地面を突くことで大地の聖霊を鎮めるのである。

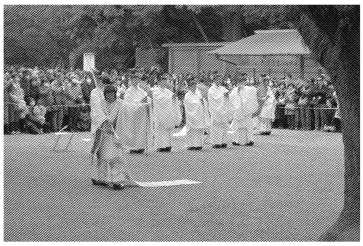

図４６　本宮前での踏歌神事（平成２７年１月１１日）

１０時、社殿前に２列の床几が置かれている。社殿側から見て右側の列には９個の床几と１つの机が置かれ、机上に高巾子の面が入った塗物の面筥が置かれている。左側には４つの床几が置かれる。やがて神職が行列をなして現れた。彼らは影向間社（ようごうのましゃ）で装いを整えて、本宮にやってきたのである。舞人は左側に、それ以外の神職は右側に着座して向かい合った。

まず陪従が催馬楽「萬春樂」（ばんすんらく）を謡い、舞人は１人ずつ舞いながら社殿に礼をする。陪従は太い箸のようなものを両手で持ち、それを叩き合わせながら謡う。催馬楽には笛の伴奏が付く。舞人は白い装束の下に橙の装束を着ており、卯杖を持っている。このとき陪従は、先ほど舞人が座っていた左側の床几の前に整列している。次いで陪従は、催馬楽「竹川」、「淺花田」を謡い、笛を吹く。これに合わせ、４人の舞人はその周りを回りながら卯杖舞、扇舞を舞う。舞い終わると、皆は元の席に戻る（図４６）。

図４７　太鼓を振る高巾子（平成２７年１月１１日）

次に面筥から高巾子の面が取り出され、神職の１人がこれを着けた。これは舞楽面のような唐の官人風の面で、独特の冠も付いている。元来は古い面を用いていたが、平成１６年に導入されたものは新しく見える。右手には赤子をあやすのに用いるような振り鼓（デンデン太鼓）を持っている。中央に高巾子が立ち、その前で詩頭が踏歌頌文を奏上する。この踏歌頌文は、熱田の宮や神宮寺を称揚し、農業や養蚕が順調にいくことを祈るものだが、現在では神宮寺に関する部分は削除されている。このとき高巾子が、左右を向いて振り鼓を振ってカタカタと鳴らす。この音が「オベロベロ祭」という名前の起源で、米粒の音と重なり、秋の豊作を連想させたのではないかと言われる。参詣客はこの音を聞いてこの年の豊兆を占うという（図４７）。

図４８　八剱宮前での踏歌神事（平成２７年1月１１日）

こののち再び舞が披露される。今度は、陪従は社殿と向かい合わせとなり、催馬楽「何そもそ

も」を謡う。この舞のあと、神職と舞人は１１時２０分に引き上げた。

こののち別宮の八剱宮、大幸田神社の神前でも、類似の行事が行われる。ただこのときは、舞人は上着の片肌を脱ぎ、なかの橙の装束を露わにして舞う（図４８）。ここまで終わったのは１３時４０分であった（『改訂熱田神宮の踏歌神事』、『愛知県史別編　民俗２尾張』などを参考にした）。

１９．大興寺の開運達磨大祭（１月中旬）

知多市の**龍雲山大興寺**は、神亀年間行基の作という大日如来像を安置している。村の総本尊とされるこの大日如来像の胎内には、永久２年１１月２２日夜火災に遭う、延応２年２月２７日補修す、と記されているという。正和年中頃、三河国吉良一色の地より遷ってきた一色太朗範氏がこの地を領有し、荒廃した堂宇を再興し、本尊の大日如来像を尊崇して、寺名を大福寺から大興寺へと改めたという。寛文６年に妙心寺派となり、現在に至っている。１月中旬に、この太興寺で**開運達磨大祭**が行われる。この祭礼では、願いを叶えた達磨を供養し、新たな達磨を買い求める人々が集まるのである。

名鉄常滑線新舞子駅で降りると、達磨大祭を見越した数台のタクシーが待機していた。駅から１５分ほど東に走ると、田圃の向こうにこんもりとした太興寺の森が見えた。参道には黄緑・赤・白・紺の鮮やかな旗がたなびき、大きな達磨を乗せた「開運大日福達磨」の宣伝塔が立っている。早くも祈願者の名前を読み上げるマイクの声が聞こえ、シラスなど海産物の露店が並んでいる。山門の前には祈禱申込所、達磨引換券配布所が設けられている。烽火が上り、その音が田園に響き渡った（図４９）。

図４９　大興寺（平成２７年1月１２日）

山門を入って左側に八大神社があり、神佛分離で分祀された神々がまとめて祀られているが、この日は達磨の引渡所となっていた。参詣者は本堂前から山門外に至るまで列をなし、祈禱の順番を待っている。本堂内では、三尊像及び達磨を前に朱色の頭巾の僧侶が経文を唱えていた。祈禱が終わると、新しい達磨を受け取ることになる。達磨は７号（３６５００円）から１号（３３００円）まであり、７号は選挙事務所などでお馴染みのものである。大半の達磨は赤いが、白いものもある。

図５０　大興寺の達磨お焚き上げ（平成２７年1月１２日）

参詣を終えた人々は、境内の露店のうどん屋に向かう。「本年も運をどーんといただいて下さい。一杯３００円　ご縁がもらえるヨ！！」との宣伝文句が掲げられている。代金を払うと、ご縁袋が付いてくる。うどんはきしめんではない丸いうどんで、鰹節、葱、油揚げが振り掛けてある。

食後境内を出ると、役割を終えた達磨たちのお焚き上げを見た。囲われた領域で、達磨が少しずつ燃えていく。両目が入ったものも、片目のものもある。人の願いとは容易には叶わぬものらしい。赤い達磨は燃えると黒ずんでいくが、完全に燃えると灰色になる。その形状を残したまま白い灰となって並ぶ達磨は、骸骨のようで悲しげだった（図５０）（新海劍太郎『大興寺故事来歴』も参考にした）。

２０．長久手の左義長（１月中旬）

左義長は歳神の依代を焼き、神聖な火によって送り出す行事で、竹などで高い塔を作り、松飾りなどを投じて焚き上げる。全国各地で「どんと焼き」、「どんどん焼き」の名前で行われるが、愛知県では「左義長」という呼称をよく見かける。「左義長」とは「三毬打」、「三毬杖」などから来たといい、正月の宮中行事である「打毬」に使う「毬杖」で折れたものを陰陽師が燃やしたのが、民間に伝わり変容したものだと言われる。凍てつく冬の早朝に早起きして出向くのは辛いが、６時半ころまでには点火しなければ、夜が明けてしまうので、燃え上がる火が美しく見えない。子供たちの書初めの作品を長い竹の先に付けて火にかざすと、忽ち燃え上がって天高く昇っていく。高く昇ったほうが、習字が上達するというのが言い伝えである。火が回ると、熱で空気が膨張し竹がはじける、つまり爆ぜる（はぜる）音が響く。太い竹が爆ぜるときには「ドン」と腹に響く音がするが、普通の竹が爆ぜるときには「パコーン」と甲高い音がする。これらの音こそ「どんと焼き」、「どんどん焼き」の名前の由来である（『愛知県史別編　民俗２尾張』、『有職故実大事典』などによる）。

図５１　長湫菅池の左義長（平成１９年１月１４日）

愛知郡長久手町では、１月中旬の日曜日早朝に、各集落でこの左義長が盛んに実施されていた。昔は子供たちが集落ごとに競争して行っていたので、夜中に他の集落の準備を壊しに行くこともあり、寝ずの番をする必要もあったという。田圃や河原で行うが、灰が広い範囲に飛び散るので、宅地化が進んだ最近では苦情を気にして開催が減っている。

長久手古戦場（大字長湫字菅池）の左義長は清々しい行事であった。前日になると、香桶川（こおけがわ）流域の広い田圃に、高い竹や藁の円錐形の搭が出現する。中心に芯となる長い竹を入れ、その周りに竹や藁を置いていくのである。当日は、まだ暗いうちから人々が集まってきて、６時に火がくべられる。あっという間に火が燃え上がり、美しい火柱が現れる（図５１・５３）。周囲では、地元住民が赤味噌の豚汁や日本酒を参加者に振舞ってくれる。地主によると、左義長の灰が肥料となって豊作になるという。７時になると周囲は明るくなり、火の勢いも収まってくる。そこでその残り火を周囲に分けて、各自が自宅から持参した網で餅を焼く（図５４）。この餅を食すると１年間無病息災となるという。なおこの日、午前中に長久手消防署で出初式もあった（図５２）。菅池の左義長はもはや見ることができず、広い田圃のあとにはイオンモールができている。

図５２　長久手消防署出初式（平成１９年１月１４日）

図５３　長湫菅池の左義長（平成２３年１月９日）

図５５　岩作壁之本の左義長（平成２９年1月９日）

図５４　長湫菅池の左義長（平成２２年1月１０日）

御嶽神社下の香流川河川敷（大字岩作字壁ノ本）でも、高い塔が竹や松で築かれるが、円錐形ではなく、裾が広がらない柱状である。高い柱を支えるために、河川敷にはあらかじめ鉄の棒が四隅に打ち込まれており、これに結わえ付ける形で竹が立てられている（図５５）。高い柱は燃え尽きると倒壊するので、火が回ってからは注意が必要である。ただ前日に雨が降ったりするとなかなか火が回らない。竹の葉はすぐに燃えてきらきらと輝くが、幹の部分は簡単には燃えないのである。残り火で餅を焼いている光景は古戦場と変わらない。ここでのお振舞はおでんであった（図５６）。またぜんざいは汁のみが振舞われ、その場で焼いた餅を入れる流儀であった。竹をくり抜いた徳利で燗酒も振舞われた。この付近は御嶽神社の森に囲まれており、いまでも左義長を行うことが出来ている。

図５６　岩作壁之本の左義長（平成３０年1月１６日）

長久手東小学校南方の農地（大字岩作字長鶴）でも左義長が行われていた。長鶴の塔は円錐形で、中核となる一本の竹を支えるために、三方向から鉄綱で固定されている。ここでは人々が６時１５分、点火前に一同が整列し、修祓、二礼拍手一礼の儀式を行う。そして「弥栄、弥栄、弥栄」と三唱して火を投じる（図５７）。前日から雪が降り、朝も大雪警報が出ていたが、積み上げた竹に燈油をかけているために、火は勢いよく燃え上がった。空を見上げると、赤く光る火の粉が周囲に散っていく。同時に雪も降っているので、「赤い雪と白い雪が降っている」と子供が呟いた。事前に準備して、残り火で餅を焼いてみた。長い柄の先についた鉄のシャベルで、収まってきた火のなかから、炭化し赤く燃えている竹を掻き出す。残り火は僅かでも火力が強く、上に直接網を置いて焼くと、餅の表面はあっという間に黒く焦げてしまう。ふっくらと満遍なく焼くためには、五徳で餅を火から離す必要があるようだ。極寒の野外で餅を焼き、醤油をつけ、海苔を巻いて味わうのは風流である。向こうでは、振舞の準備もできたようだ。白菜、人参、大根を入れた赤味噌汁である。こちらが餅を焼くのに夢中になっていると、わざわざ味噌汁を配達してくれた。あたりはもう明るくなっている。雪は降り続け、周囲は一面の雪景色となっていた。

図５７　岩作長鶴の左義長（平成２９年1月１６日）

２１．下粟代花祭（1月第2土・日曜日）

図５８　下栗代花祭の滝祓い（令和２年１月１１日）

１月第２土・日曜日には、**北設楽郡東栄町下栗代**で振草系の花祭が行われる。下栗代花祭では、明治期に導入された神道儀礼がよく保存されている。１２時半過ぎに飯田線東栄駅に着き、バスでとうえい温泉に向かい、昼食後にタクシーで下栗代に向かった。下栗代は山間の集落である。花宿は、昭和５７年以降は民家ではなく下栗代生活改善センターという鉄筋コンクリートの建物で、コンクリートの土間にはコンクリートの常設竈があって、五色の草が飾られている。土間の右側には神座、会所（そのなかに天も）があり、左側には炊事場、囲炉裏がある。外には宮迎えをするべく白木の神棚が設えてある。紺の法被を着た若い衆が、白い軽トラックの荷台に乗って、宮迎えの準備に出かけた。１４時、宮太夫及び宮人が滝祓いのために歩き始めた。宮太夫は黄緑の羽織、宮人は紺の着物を着ている。１０分以上山の奥に分け入ると、そこに幅の広い谷川があり、滝があった。滝祓いは、水も間近に迫る岸辺の不動明王像の前に薦を敷き、宮太夫を中心に行われた（図５８）。一同は花宿に戻ったが、そこでは神職と囃し方により宮迎えの行事が行われていた。宮太夫たちは、滝とは別の山中に分け入り、高根祭を行った（図５９）。続いて会館横の駐車場に移り、辻固めが行われた（図６０）。一同は花宿に入り、神を迎え入れる一連の儀式、すなわち神入り、棚飾り、天（あま）の祭り、切目の王神が行われた。ここで休憩となり、宮太夫、宮人を始め関係者は接待所に入って１７時に夕食をとった。花見舞を納めた見学者には稲荷ずしが配られた。

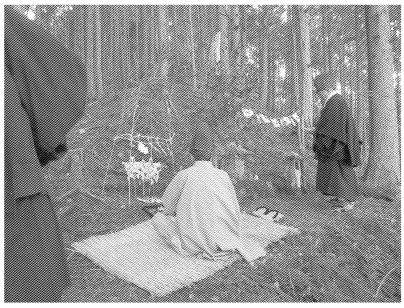

図５９　下栗代花祭の高根祭（令和２年１月１１日）

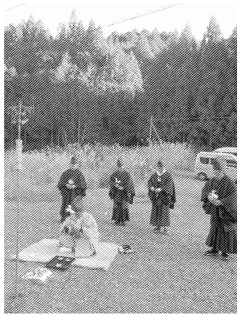

図６０　下栗代花祭の辻固め（令和２年１月１１日）

１８時２０分から竈祓いが始まった。セイト番が釜に滝の水を入れ、火をつけた。宮太夫が薦の上に座り、印を結び、祭文を唱える。続いて注連おろし、なりもの、太夫の大工、五方の御門、小木拾い、湯立て、総神迎え、楽の舞、さるご囃し、とうご囃し、四季囃し、御神楽と丁寧に手続きを踏んで、神々を迎え入れていく。２０時５０分、市の舞が始まり、地固めの舞に移った。この地固めの舞の最中、天では中申しという別の祈禱が行われ、願主の姓名などが読み上げられた。花の舞を経て、２時半頃、松明に先導された山割鬼が登場し

図６１　下栗代花祭の榊鬼（令和２年１月１２日）

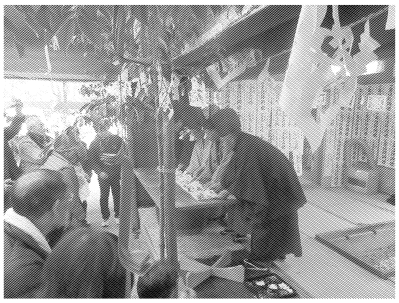

図６２　下栗代花祭の神返し（令和２年１月１２日）

た。三ツ舞、榊鬼（図６１）を経て、7時前におつるひゃらに入る。これは孕み女、ひょっとこ、娘、潮吹き、みこが登場する喜劇で、特に前四者がコミカルな動きをし、人々に米や味噌を塗りつけようとする。孕み女は腹に詰め物をし、娘と共におかめの面をつけているが、みな男性である。潮吹きもひょっとこと同じく、ゆがんだ顔の男性の面をつけている。最後に出てくるみこは、一人優美な動きをする。翁に続いて、いよいよ屈強な若衆４人による湯ばやしになる。茂吉鬼は、全身茶色で緑の面だった。茂吉鬼は、湯蓋のなかにある蜂の巣と呼ばれる薬玉を槌で叩き落とし、縁起物なので皆がこれを奪い合った。獅子は面を付けた先導役と獅子との掛け合いである。ひいなおろしで湯蓋天井から降ろし、五穀祭り・棚返し・神返しは太鼓の上に戸板を置き、和紙を敷き、その上に米、麦、栗、稗、蕎麦、柿などを供え、祈禱の最後にそれを舞庭に撒き散らすのである（図６２）。また続く宮送りでは、参加者が粥を箸一本で食する。そして荒神休め、外道払い、しずめという総括に入るのである（『奥三河のき山放送局第 44 回』なども参考にした）。

２２．幸田の凧揚げ祭（1月第２日曜日）

図６３　幸田凧揚げ祭（平成３０年1月１４日）

大久保彦左衛門忠教の領地があったことで知られる額田郡幸田町では、凧が名物である。東海道線相見駅を降りると、西口から出て幸田駅の方角に歩き始めた。初めは住居などが立っていたが、やがてビニールハウスとなり、田圃が開けた。花火が打ち上る音が響いている。この日は素晴らしい快晴で、冷え込みも厳しかった。やがて川が見えてきて、その土手に上がると、すっかり雪に覆われた御嶽山を、まともに望むことができた。

川の向こうには凧揚げ会場があった。東海道線と新幹線とに挟まれた広大な田圃があって、新幹線の向こうにゼンソーの工場が見える。会場には中央に畦道があり、東海道線側が大凧の領域、新幹線側が中凧（縦横７０～１８０糎及び立体凧、連凧を含めた創作凧）、全国の凧、小凧（縦横７０糎未満）の領域、フリーゾーンが設けられている。小凧の領域のそばには本部、屋台が設けられ、屋台では焼鳥、豚汁などが提供されていた。本部前からは、蛸のような幸田町の凧が揚げられている。９時半、本部前の舞台で開会式が行われた。この際、島原市長が参加していることが告げられた。これは島原領主が元来この地域の出身であるためという。凧は競技の対象とされ、絵柄、骨組、揚がり具合が審査される。参加者は地元のみならず、東京からの参加もあった。開会式のあと、皆は解散してそれぞれ凧揚げに取り掛かった。中凧、全国の凧、小凧の領域では、和凧、洋凧、連凧など、皆が思い思いの凧を揚げている。本部では簡単なビニール製の凧を販売しており、それを買ってすぐに揚げることができた。この日は晴天であるばかりでなく、風が十分に吹いており、一人でも簡単に凧を揚げることができた。

やがて人々の関心は大凧に移った。地元の地区、学校、企業などがそれぞれ大凧を出展している。中央の畦道に沿って各所にテントが張られ、焚火がなされ、揃いの法被を着た人々が集まっている。田圃には敷物がされ、そこに１０畳にもなろうという大きな凧が寝かされている。絵柄は歌舞伎のものが多いが、ピカチューなど現代的なものもある。これを広大な田圃に長く綱を伸ばして、一気に揚げるのである。小さな凧は簡単に揚がるが、大きな凧はバランスを崩して墜落することもある。勢いよく大空に送り出すためには、揚げる際に綱を適当に引く必要がある。大空に揚がった大凧を見て、

どうして大凧を作るようになったか、その理由が分かった。普通の中小の凧は、揚げること自体は楽しいが、絵柄はもはや全く見えない。大空に浮かぶ点にしかならないのである。青空に揚がった凧の絵柄を楽しむためには、凧がそれなりの大きさを備える必要がある。巨大な大凧は作るのも揚げるのも難しいが、青空に歌舞伎絵などが浮かぶ様は美しい。とはいえ大凧でも、空に高く上がると意外に小さいという印象もあった（図６３）。

表彰式を前に会場を後にした。会場から幸田駅まではゼンソーの提供によるシャトルバスが頻繁に運行されている。人々は幸田駅から西へ東へと帰宅していった。

２３．砥鹿神社の粥占祭（1月１５日）

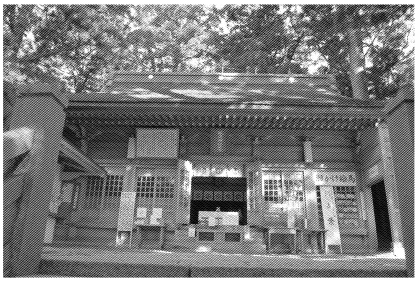

図６４　砥鹿神社奥宮（平成２８年1月１５日）

粥占祭は、**砥鹿神社奥宮**で１月１５日早朝に開催される豊作祈願の祭礼である。釜で米を炊くが、その際５糎ほどに切った矢竹を２０ほど入れておく。この小さな竹管には、一つ一つに農作物の名前が彫り込んである（図６５）。米に混ぜて炊いた結果、この管にどれほどの米が入り込んでいるかで、その農作物の今年の出来を占うのである。

図６５　竹管（平成２８年1月１５日）

奥宮へは登山道があるが、朝方の祭事となると自動車を使用するしかない。１月１５日、前夜から宿泊していた豊橋を飯田線で６時過ぎに出発した。本宮山登山口の最寄駅は長山駅だが、敢えて新城駅まで行ってタクシーを拾う。朝の晴天の下を登っていくうちに、気が付くと前を、神職を乗せた砥鹿神社のマイクロバスが走っている。凍てつく頂上には７時半に着いた。砥鹿神社奥宮へは駐車場からやや歩く必要があり、途中に杉林の間から富士山の頂上付近のみを望める箇所がある。奥宮は鬱蒼とした森に囲まれた木造社殿である（図６４）。

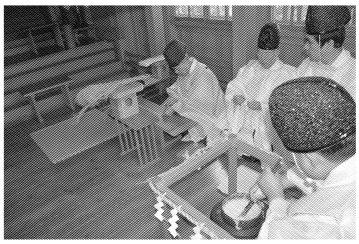

図６６　卜定（平成２８年1月１５日）

図６７　卜定書（平成２８年1月１５

８時、緊張の面持ちで集まった１０人余りの人々を前に、３人の楽士が雅楽の演奏を始めた。神前にはすでに炊き上がった粥が神釜に注連縄をして供えてある。厳粛な雰囲気のなかを、横の扉から４人の白衣の神職が入ってきた。開扉、献饌、祝詞奏上のあと、祓い言葉が朗々と唱和されるなかで、一人の神官が身を乗り出して神釜のなかを探り始めた。神前には他の神官たちが着座し、管が出てくるのを待つ。神釜には粥がぎっしりと入っており、長い矢竹の箸でなかの管を掻き出すには時間がかかる（図６６）。見付かった管を２人の神官が紙で拭い、一番神前に近い神官に渡す。この神官は稲藁の茎を使って管のなかに入った米を、俎板の上に一つ

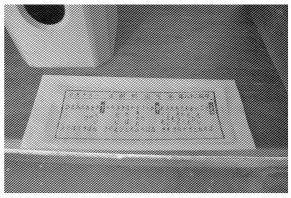

図６８　粥占符（平成２８年1月１５日）

ずつ押し出して、ミミズのように並べていく。やがてこの神官は、毛筆で次のような「卜定書」を作成した。「上　そば　ごま　わせいね　かひこ　わせむぎ　志やうが　あぶらたね　こむぎ　さつまいも　おくむぎ　中　あゐ　くは　さたう　うみのれふ　わた　はたばこ　きび　さといも　きび　さといも　ちや　あさ　下　おくいね　をかぼ　あづき　志ほ　あは　まめ　ひえ」。卜定書は三宝の上に乗せられた（図６７）。この内容を木版印刷した粥占符が、のちに社務所でも配布された（図６８）。

儀式が終わってから山頂付近を散歩してみた。社殿は山頂よりやや下ったところにある。山頂にはテレビ塔が多く立っており、その前には雄大な眺めが広がっている。また付近には岩戸神社があり、「国見岩」（天の磐座（いわくら））がある。これは大己貴命がこの岩山に神霊を留め、ここから国見して「穂の国」（東三河）を作ったとされる場所である。この御神体の岩には下に降りる口があり、降りていくと岩の下に小さなくぼみがあった。だがそこにインド風の小さな佛像が祀られていたのは意外であった。

下山の道は思いのほか長かった。山頂から降りようとすると、次々と登山客が登ってくる。最後に登山道を出ると、そこには「本宮の湯」があった。疲れを癒すには丁度よい。本宮の湯を堪能してから、飯田線の長山駅まで歩いて帰った（『三河國一宮砥鹿神社誌』なども参考にした）。

２４．熱田神宮の歩射神事（1月１５日）

熱田神宮で毎年１月１５日に行われる「**歩射神事**」（ほしゃしんじ）は、豊年と除災とを祈る行事で、俗に「御的」（おまとう）ともいわれる。

神宮宮聽前を通って１２時過ぎに神楽殿前庭に至ると、会場の準備が整っていた。神楽殿前には、射手たちが入る幄舎が設けられ、青白の鯨幕が張られている。西楽舎の右隣には、神職たちが陣取るもう一つの幄舎が設けられている。神楽殿前の幄舎と正対して、神楽殿前庭が終わる信長塀の辺りには白い幕が張られ、その前に巨大な霞的が設けられている。木製の掘立柱３本に緑の薦が垜の代わりに張られ、その上に霞的が張られている。霞的の中には、蒲鉾板ほどの大きさの千木（ちぎ：大的に付した木片）が１２時、３時、６時、９時の位置、そして真中に計５つ取り付けられている。神楽殿前の幄舎と大的との間には、真中あたりと大的前に白砂の小山が築かれている。真中あたりには二列に四つずつ、大的前には七つある。これは神事の際に、射手の居場所を示す印となる。大的に向かって左側には、白木の唐櫃が置かれている。

１２時３０分、宮聽の入口が開かれ、中で太鼓が打ち鳴らされた。１２時４３分、信長塀の向こうから警吏を先頭に１４人が一列になって入ってきた。先頭の６人は右手に弓矢、左手に中啓を手にした射手、そのあとに４人の笏を持った神職で、彼ら１０人は白の狩衣、袴に立烏帽子を着けている。最後に笹竜胆の紋を染め抜いた青の直垂に侍烏帽子を着けた若い従者（矢取）２人が続いた。彼らは幄舎横で手を清めた。そこに、緑の直垂に侍烏帽子の従者を先頭に、白い狩衣に緑の袴の神職、黄の水干に張烏帽子を着けた従者が来て、最後の人物は案に小さな弓矢を乗せてきた。この神職は幄舎に入る前、熱田神宮拝殿の方角を向いて低頭し、これに合わせて一同も低頭した。このあと白衣の狩衣を来た神職が数度にわたってやってきて、西楽舎の右隣の幄舎に入った。な

図６９　的前の神事（平成３０年1月１５日）

おこれら奉仕者は全員が男性である。彼ら奉仕者が全員入場すると、信長塀のところが塞がれ、青白の鯨幕が張られた。

図７０　行射（平成３０年1月１５日）

１３時になって、神楽殿前の幄舎から黄の水干の従者を先頭に、笏を持った神職５人、緑の直垂の人物が大的のところに向かった（図６９）。神職は御幣を霞的の上部に３つ横に並べて差した。そして小さい弓矢を持ち、天に向かって、そして地に向かって引き絞った。それに続き、大的の前で一同は唐櫃から出した神饌を口にした。そののち一同は幄舎まで戻ったが、途中一同が突然一斉に腰を落とし、的、あるいは最後尾を歩む案（小さな弓矢が乗せられている）を持った黄の水干の人物を振り返る仕草をした。

１３時２０分、初立の行射が始まった。２人の射手（神職）のそれぞれに介添の神職が付き、直垂の矢取が続く。一同は幄舎前で向かい合って礼をし、２列に４つずつ白砂があるところに向かった。初立、中立、後立の各２人の射手が、矢を一手（２本）持って射位に立ち、各３回、計３６本を奉射した。射は小離れであり、独特の動作を伴う（図７０）。最後の矢が射られたと同時に、参拝者が一斉に大的を目指して押しかけ、大的の断片、特に魔除けになるという大的の千木を奪い合った。大的を巡るもみ合いは長く続き、その間に神職たちは粛々と引き上げていった。

２５．師崎の左義長祭（1月第４日曜日）

知多半島南端の漁村師崎では、海辺で大幟を用いる独特の左義長が行われる。師崎の５つの字（**的場、鳥西、鳥東、栄、荒井**）の左義長は、大きな幟や爆竹を用いる勇壮なものである。師崎では、左義長のことを「さぎっちょ」、「もちん」（望月（満月）に行われることから）などとも呼んでいた。かつては旧暦１月１５日に、１５から２５歳までの男子により行われていたが、現在では1月第４日曜日に、２５歳以上も加えて行われる。

１１時半に河和駅からバスで出発すると、正午ごろ師崎の的場漁港が見えてきた。大漁旗を掲げた船が集まるなか、岸壁にお札、正月飾り、小さな竹が山積みになっているが、長久手のように高くはない。その隣に縦１０米、横３米の大幟が、半島最南端の羽豆岬（**羽豆神社**の神域）に向けて立てられている。神に見立てたこの大幟は、野間から切り出した竹及び美濃和紙で作られており、鯛と的の黄文字、上に干支の羊が描かれ、これを「判じ絵」という。幟は幡に通じ、幡は幡頭（羽豆）神社に通じるという。更に大幟の下には、「軍艦」と呼ばれる竹と紙で作った全長一米ほどの黒い小船が置かれ、同じく黄色で的の文字が描かれているが、これは日露戦争の戦勝記念で付け加わったものらしい（図７１）。漁港では、地元関係者が見学者に綿あめを振舞っている。いまはコンクリートで固められた高い岸壁の上で行われるこの左義長も、海岸が埋め立てられた昭和３０年代より前は浜辺で行われ、潮の満ち引きにも左右されたという。のどかな漁村の街並みを通って近くの羽豆岬にも足を延ばしてみたが、三河湾と伊勢湾とを同時に望める岬は、青空の下で眺めが爽快だった。いまではアイドル・グループＳＫＥ４８の歌碑が立っている。やがて地元の人々が集まってきたが、奉仕するのは２５歳の裸

図７１　師崎左義長の軍艦（平成２７年1月２８日）

の厄男たちで、みな白の褌に黄色の帯をして裸で臨んでいる。

１３時、まず神事が行われ、酒や塩をまいて山積みの飾り物が清められたあと、それに火がかけられた。火種は、羽豆神社の別当職だった神護寺で護摩供養をしたものだというが、この習慣は平成に入ってから付加されたのだという。次いで裸の若衆に曳かれた軍艦が３回その周りを回った（図７２）。軍艦には多くの爆竹が仕掛けられており、火が付くと猛烈な爆音が轟く。そして判じ絵の描かれた幟が、若衆によって火中に投じられる。白地の布である幟はすぐに燃え上がるが、竹でできた竿の部分は長大で、地中深く差し込んであり、火中に投じても簡単には燃え尽きない。このため何度も火中に投じる作業が繰り返される。幟が燃えていくと、人々がアルミ箔でまいた餅を針金で竹竿にぶら下げたものを持って現れ、残り火で焼いて食べる。最後に、その場で餅投げが行われるのである。

図７２　師崎的場の左義長（平成２７年１月２８日）

的場の祭礼が一通り済むと、人々は鳥西、鳥東、栄へと順に歩いていく。途中の岸壁には貝がびっしり付いている。５つの集落で同じ祭礼が行われるが、ただ今日では最初の字である的場、最後の字である新井でのみ大幟が燃やされ、それ以外の字では幟や軍艦が登場しない簡略化した祭礼のみが執り行われる。神事は同じ形式で行われ、こちらは先ほどより間近で見物できてよい。餅投げも各字で繰り返され、鉄骨を組んで作った台から、餅や菓子が播かれた。

そして１４時半、人々は荒井に集まった。ここの祭礼は海岸から近い大きな駐車場で行われる。的場と同じく巨大な幟が立てられ、海岸では黒い軍艦が出番を待っている。周囲には子供が作成したと思われる、小さな幟が多く立てられている。婦人連は、紙コップに知多半島の地酒「國盛」を注いで男たちを待っている。神事が行われると、厄男たちが軍艦を引いて現われた。激しい爆音が広場に響く。大幟に続き、子供たちの小幟も火中に投じられた（図７３）。祭礼はここでも餅投げで終わった（南知多町「師崎・左義長まつり」、地元説明版なども参考にした）。

図７３　師崎荒井の左義長（平成２７年１月２８日）

２６．大府の七福神巡り（１月最終日曜日）

福を呼び込む大府の七福神巡りは、ＪＲ大府駅から東海道線を挟んで大回りし、七つの寺院を巡る巡礼で、浄通院前の掲示によると、昭和初期からの歴史があるという。右回りの徒歩巡礼を志して１１時１０分に駅を出発した。

第一は、**壽老尊天を祀る光明山大日寺**である。大府駅西口を出てすぐ近くで、１１時２０分に着いた。本堂では御朱印を求める人たちが列をなしている。本尊の前に壽老尊天を安置した厨子があり、その横に七福神を描いた大きな瓢箪が置かれていた（図７４）。

第二は、**毘沙門天を祀る延命山地蔵寺**である。地蔵寺への道は遠く、自動車道沿いを歩いて北上し、１２時３７分に着いた。隣にはどぶろく祭りで有名な長草天神社がある。本堂の扉が少し空いていて、

毘沙門天が安置されていた。人はあまりおらず、静かだった。

第三は、**惠比壽尊天を祀る慈雲山浄通院**である。長草から東進し、東海道線をまたいで１３時１１分に着いた。この間逆回りの一行とすれ違うこともあった。惠比壽尊天は、本堂奥の本尊のすぐ前の厨子のなかに安置されていた。

第四は、**辨財尊天を祀る萬秀山光善寺**である。また長い道のりがあり、河津桜の植わった池のある公園を越えて、１４時に着いた。「南無観世音菩薩」の白旗が並ぶなかを進むと、本堂の扉が少し空いており、そこに厨子があって、手が６つある辨財尊天が厨子のなかに安置されていた。

第五は、**布袋尊天を祀る北嶌山賢聖院**である。殉国の碑を左に見て、東海道新幹線をくぐって進むと、小さいが天守閣のように立派な楼門が見えてくる。１４時１８分に着いた。ここには中高年２０人ほどの巡礼者が御朱印を求めて行列していた。堂内には、閻魔大王、本尊の観世音菩薩、弘法大師、布袋尊天と右から左へ平等に並んで安置されていた。

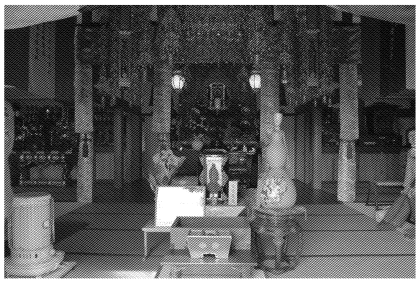

図７４　大日寺の壽老尊天（平成２９年1月２９日）

第六は、**大黒尊天を祀る海雲山普門寺**である。ここには１４時３０分に着いた。本堂の閉じた扉の前に大黒尊を安置した厨子が置いてあった。ここの楼門も立派で、なかに新しい大粒の数珠が滑車にかけてあって、信徒が回すとパチパチと大きな音を立てていた。

第七は、**福祿壽尊天を祀る永光山地蔵院**である。着いたのは１５時１２分だった。本堂の扉が開いていて、本尊の前に福祿壽尊天を安置した厨子があった。ここまでくると、駅までもう少しである。大府駅に戻ったのは、１５時半だった。